令和二年度

高山市近代文学館調査・研究報告書

令和三年三月

一般社団法人　高山市文化協会

序

一般社団法人　高山市文化協会は、高山市から委託を受けて、郷土に係わりのある文学作品を収集・調査して、作者の功績とともに「高山市近代文学館調査・研究報告書」にまとめ、市民の皆様に紹介しています。

明治後期の俳諧の世界では新傾向俳句が主流になり、一層俳句が広く普及し盛んになっていました。その頃、柚原畦董・中谷芋ノ子・瀧井折柴が「深山会」を結成し、お互いが俳句に没頭していました。明治四十二年、当時の俳句界では第一人者の河東碧梧桐が、連載記事「続一日一信」の取材旅行中に高山に立ち寄り、それを機に町内の有志が集い盛大な歓迎句会が開催されました。また、明治四十五年の「日本の山水」の取材の際にも来高し歓迎句会が催されるなど、飛騨と中央で活躍する俳人との交流が深まる大きな契機となりました。

今回の「高山市近代文学館企画展」では、「明治時代後期の俳句会」と題して、高山市名誉市民「瀧井孝作」の著書『俳人仲間』第一部「飛騨高山にて」及び第四部「出郷」から、本文に出てくる主な顔ぶれや、中央俳壇への投稿などを基に、当時の俳句会の様子を、作品と調査資料によって紹介しました。

令和三年三月

一般社団法人　高山市文化協会

目　次

第三十二回近代文学館企画展「明治時代後期の俳句会」……1
一、明治時代後期の俳句会の様子……2
第一章　実際の俳句会の流れ……2
第二章　瀧井孝作著『俳人仲間』抜粋……4
第三章　明治後期の飛騨の俳句結社……6
第四章　七月十六日碧梧桐歓迎句会出席者の経歴……9
第五章　『ホトトギス』、『日本及日本人』などへ飛騨からの投句の様子……15
第六章　唐井清六『瀧井孝作ノオト』……18
二、写真……36
三、明治時代後期の俳人手蹟など……39
第一章　河東碧梧桐……39
第二章　瀧井孝作……42
第三章　岩谷山梔子……46
第五章　柚原淇澳……47
第六章　福田鋤雲……48
第七章　小鳥良々……49
第八章　勇　桂雪……50
第九章　永田不及……50
第十章　西本小夢……51
第十一章　伊東清秋……52
第十二章　上木象雨……53
第十三章　柿下青緑……54
第十四章　中村不折……56
第十五章　川西和露……56
四、その他……57
第一章　明治大正俳人筆跡屏風……57
第二章　瀧井孝作らから中谷芋子への手紙……59
第三章　高山市街略図……66

第三十二回　近代文学館企画展
「明治時代後期の俳句会」

令和三年二月二十日(土)～二十一日(日)　於　高山市図書館「煥章館」

一、明治時代後期の俳句会の様子

第一章　実際の俳句会の流れ

明治中期に、正岡子規によって革新された俳句は、明治後期になって高山でも広く普及しました。俳句結社がいくつも興り、市内の各所で俳句会が催されました。

俳句会においては、事前に兼題が示されており、参加者には投句用紙が配られます。投句用紙は短冊状になっており、数枚渡されます（会の時に兼題が示される場合もあります）。

以降に実際の俳句会の流れを説明します。

投　句

投句とは、自作の句を提出することです。

参加者は、投句用紙に自作の句を書き、無記名で幹事へ提出します。

清　記

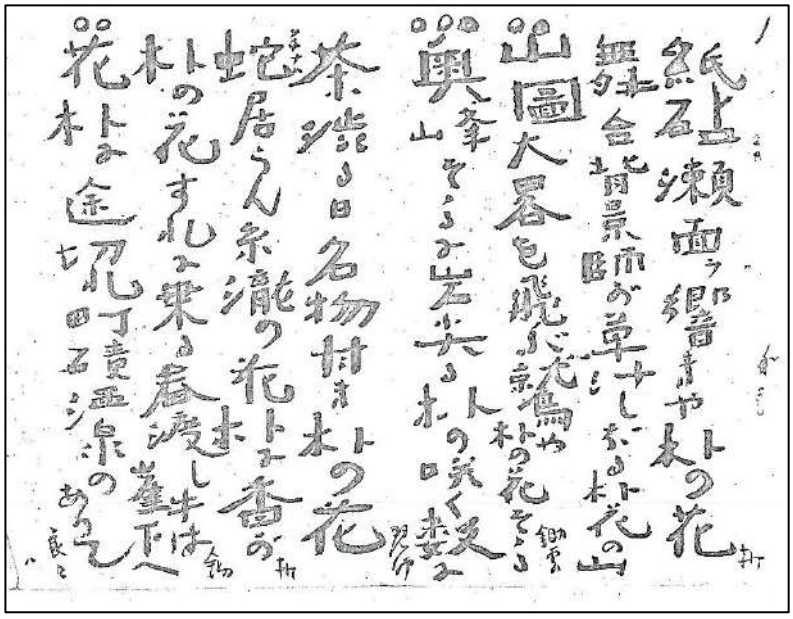
清記とは、投句された句が誰のものであるか分からなくなるように、別の紙に書き写すことです。

全員の投句が済んだら、幹事は全員の投句用紙を混ぜ合わせ、参加者全員に配りなおします。一人あたりに配られる数は、投句数と同数となります。

更に、各人に清記用紙が配られ、用紙番号が振られます。通常は主宰者が一番で、右回りに二番、三番と番号を記入します。

次に、配られた投句用紙の俳句を、手元の清記用紙に丁寧に書き写します。（誤字などがあってもそのまま書き写します）

［清記の例］



※句の作者名は後から書き加えたもの

選　句

選句とは、投句された句の中から、自分の作品以外でよいと思うものを選び出し投票することです。

まず、自分の書いた清記用紙の中に気に入る句があれば、それを書き出します。（この時、清記用紙番号も控えます）

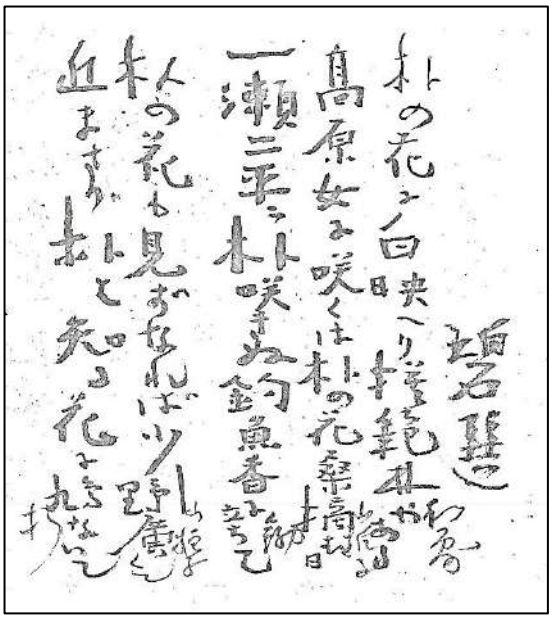
次に手元の清記用紙を左隣りへ回し、右隣の人の人から次の清記用紙を受け取り、また気に入る句を書き出します。

これを繰り返し、全ての清記用紙が一周したら、清記用紙を幹事さんが回収します。

書き出した句の中から、規定数を選び、清記用紙番号順に選句用紙に記入し、幹事さんへ提出します。

なお、回覧された清記用紙の自分の句に誤字などがあった場合は、この時に赤字で訂正します。訂正箇所については、回収後に幹事さんが発表します。

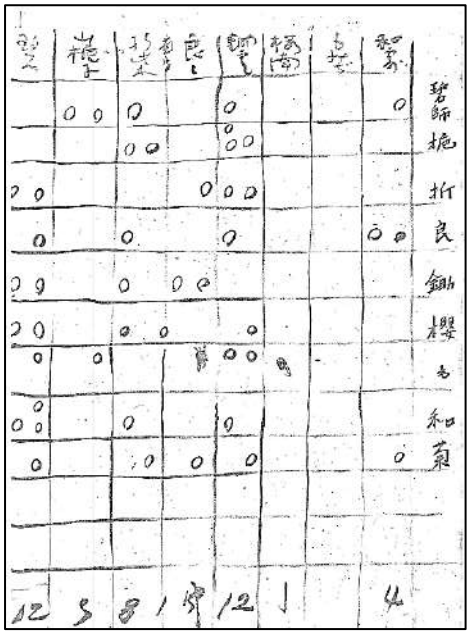
［選句の例］



して、評や助言を行うことです。

通常は主宰者が行いますが、著名な人物を招いた句会などでは、招待者が選評を行う場合もあります。また、披講の際にも招待者の選句が最後に読み上げられます。

［得票用紙の例］



披　講

披講とは、選句された句を読み上げることです。声の良い人が行います。

披講者は、①披講者自身の選句、②一般参加者の選句、③主宰者の選句の順に読み上げます。

披講の際に自分の句が読み上げられた時は、大きな声で自分の俳号を名乗ります。多くの人に選ばれれば、何度も俳号を名乗ることになります。

幹事は、披講で読み上げられた句の作者を別の用紙に勘定し、優秀者の決定などを行います。

選　評

選評とは、主宰者が投句された一つ一つの句に対

第二章　瀧井孝作著『俳人仲間』「飛騨高山から」「出郷」抜粋

明治四十二年

柚原畦菫・中谷芋ノ子・瀧井折柴の三人で句会「深山会」をつくる。

この頃、花蔭会・雲橋社という旧派の社中が存在

七月十五日

河東碧梧桐、紀行『続一日一信』の旅行中高山に逗留。

宿舎「ひらのや」、住伊書店で柚原畦菫が碧梧桐と出会う。

当日住伊書店が『飛州志』を刊行し、河東碧梧桐購入。

七月十六日夕刻　河東碧梧桐の歓迎句会を開催

会場　洲岬屋

席題　納涼二句

参加者　永田　不及（永田　吉右衛門）
小森　秋良（小森　文助）
小森　耳風（小森　春雄）
伊東　清秋（伊藤　仙十郎）
杉下　守中（杉下　元次郎）
西本　小夢（西本　達郎）
福田　鋤雲（福田　吉郎兵衛）
柚原　淇澳（柚原　熊造）
長瀬　壺仙（長瀬　茂八郎）
小野　東洲（小野　松次）
柿下　青緑（柿下　清六）
田中　林崖（田中　貢太郎）
菅田　十歩
長尾　桃雨（長尾　新六）
上木　象雨（上木　捨三）
真木　帆逸（真木　半一郎）
赤保木竹友（赤保木寅之助）
勇　桂雪（勇　伊助）
住　広（住　広造）
柚原　畦菫（柚原　畦三）
中谷芋ノ子（中谷　久次郎）
瀧井　折柴（瀧井　孝作）
日下部雨外

七月十六日夜

本日の出題一題二句では物足りないので、明日河東碧梧桐先生の指導を得るため、勇寿司（勇　桂雪宅）に集まる。

会場　勇寿司

席題　合歓の花　十句

参加者　柚原　畦菫
中谷芋ノ子
瀧井　折柴
勇　桂雪

七月十七日昼　昨夜作った「合歓の花」十句に河東碧梧桐先生からの指導を得る。

会場　住佐

参加者　柚原　畦菫
中谷芋ノ子
瀧井　折柴
西本　小夢
伊東　清秋
福田　鋤雲

○御判戴く椽静かさや合歓の花　畦菫
、御山曇り結願の日を合歓の散る　同
、葉柳や高楼に寝て出舟待つ　同
○葉柳や水濁す子等川上に　芋子
、合歓の花子等辷る岩公園に　同
、女獲島の記読む日頃や合歓垂るる　折柴
、合歓の花繭干す庭のかすみけり　同
○漁暦になき赤汐や夏柳　同
、葉柳の月紫蘇畑の真黒な　同
○葉柳や朝靄に打つ紙砧　鋤雲

句評の後自作二題を半紙一枚に六朝風の字で書かれた

分水起工水量る頃や夏柳　碧
葉柳に書肆ありて客も掬む辻井

折柴の白扇には
子を叱るさまでもと思ふ瓜の宿　碧

七月十六日　洲岬屋での会席順

柚原淇澳(34 歳)
長瀬壺仙(40 歳)
小野東洲(？歳)
柿下青緑(33 歳)
田中林崖(43 歳)
菅田十歩(22 歳)
長尾桃雨(35 歳)
上木象雨(？歳)
真木帆逸(25 歳)
赤保木竹友(？歳)
勇　桂雪(31 歳)
住　広造(29 歳)

瀧井折柴（15 歳）
中谷芋ノ子（20 歳）
柚原畦菫（20 歳）
河東碧梧桐（36 歳）
（空席）
永田不及（36 歳）

小森秋良(55 歳)
小森耳風(30 歳)
伊東清秋(？歳)
杉下守中(41 歳)
西本小夢(42 歳)
福田鋤雲(41 歳)
日下部雨外(60 歳)

第三章　明治後期の飛騨の俳句結社

花蔭会[かいんかい]

明治二十二年(一八八九)頃、高山町前越旭州の提唱に依って創立された俳壇で、漸次隆盛となり明治四十三年一月を以て、月次句会百五十回記念句碑を大隆寺に建てた。(句碑背面) 我が花陰会は明治二十二年に起こり今年四十三年一月を以亭其第一百五十回を開くに至る茲に同人相謀り句碑を建設し以て記念となす。需に應し伊藤松宇書。明治四十三年四月花陰会主唱者長尾桃雨、勇伊助…(略)。

明治四十三年五月二十五日、五松庵不及宗匠の立机式を東照宮社務所にて執行し、五松庵立机披露句集を発行した。句集千八百余名一万四千句に及ぶ盛況であった。大正四年十月、花陰会月次句会二百回記念に城山正雲寺に芭蕉古池の句碑を建てた。大正七年二月不及宗匠歿し稍衰えたが、昭和五年六月茶仏庵壺仙其の統を嗣ぎ立机式を行った。

【高山市史下巻】

雲橋社[うんきょうしゃ]

幕末紛乱の世に際し、雲橋社の耆宿前後調謝して、社運漸く哀頽に傾いたが、加藤趫翁独恬淡として社童と共に残燈を守り俳諧の維持に努めて来た。斯くて明治初期を過ぎて文運漸く振興し、桃村・周可・小湖・枘齊等相次ぎて社中の人となった。

明治十九年福田蕉滴県会議員として岐阜市に往来したが、時の知事小崎我々亭蕉滴に勧めて獅子門道統第十七世棚橋碌翁の門に入らしめた。爾来蕉滴・原長松・上木可中・日下部雨外・古島夕景・柿下得園・野中井蛙等と語らい瓢箪会を組織し、時々俳莚を開いた。

然かし適当な指導者がないので、趫翁に請いて雲橋社第四世の立机式を挙けしめた。

奥村野秋歿後雲橋社文机空しく庫中に藏せられること茲に三十二年、終始正風俳統を死守して来た趫翁・掃月の功績を思わねばならない。明治二十四年十二月二十四日可中庵に於て瓢箪会の納会を開き、席上掃月・雨外を双方の代表とし、瓢箪会を雲橋社に併合する議を決し、爾来毎月二、三回俳席を開いて研究を継続した。

【高山市史下巻】

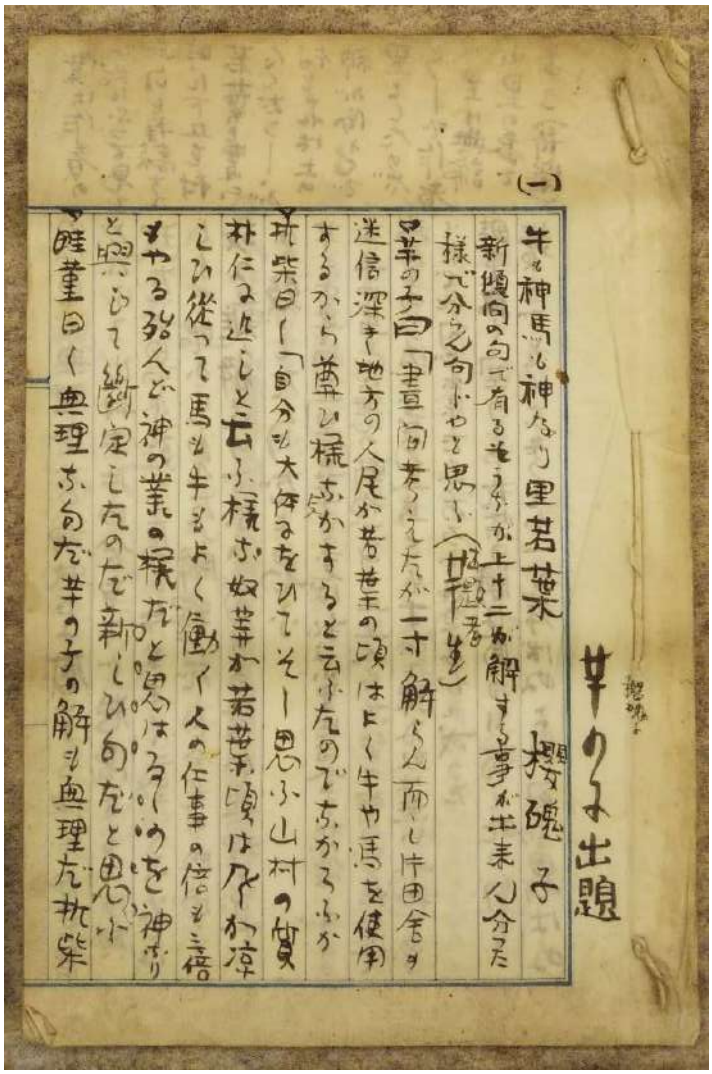
深山会[しんざんかい 又は みやまかい]

明治四十二年に、柚原畦菫・中谷芋ノ子・瀧井折柴の三人で作った俳句会。

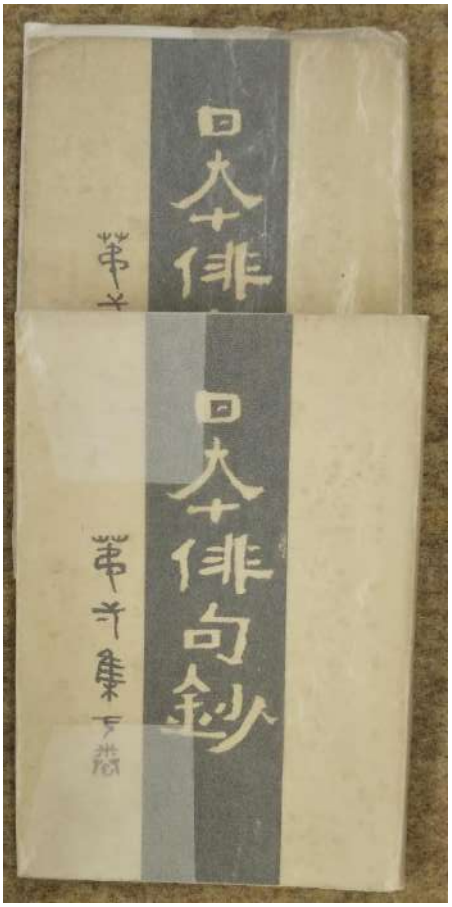
『日本俳句鈔』の中から好きな句、難解な句を各自何句か持出して、その句評検討の回覧雑誌を作り、一句一句につき順に感想を書き込

み、三人だけで回覧した。

実際の回覧用紙［芋ノ子出題］

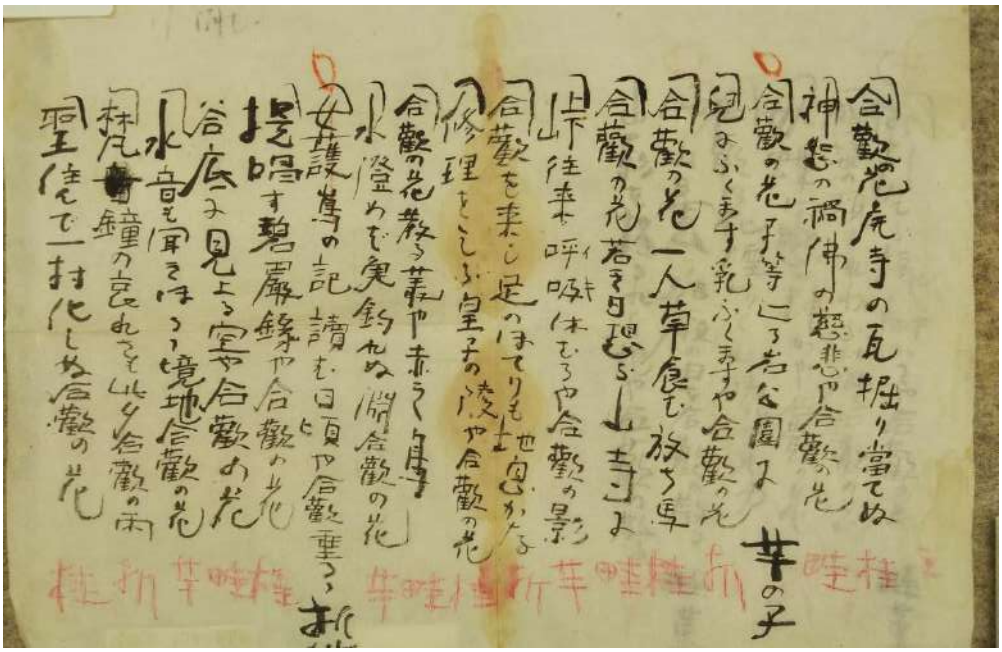


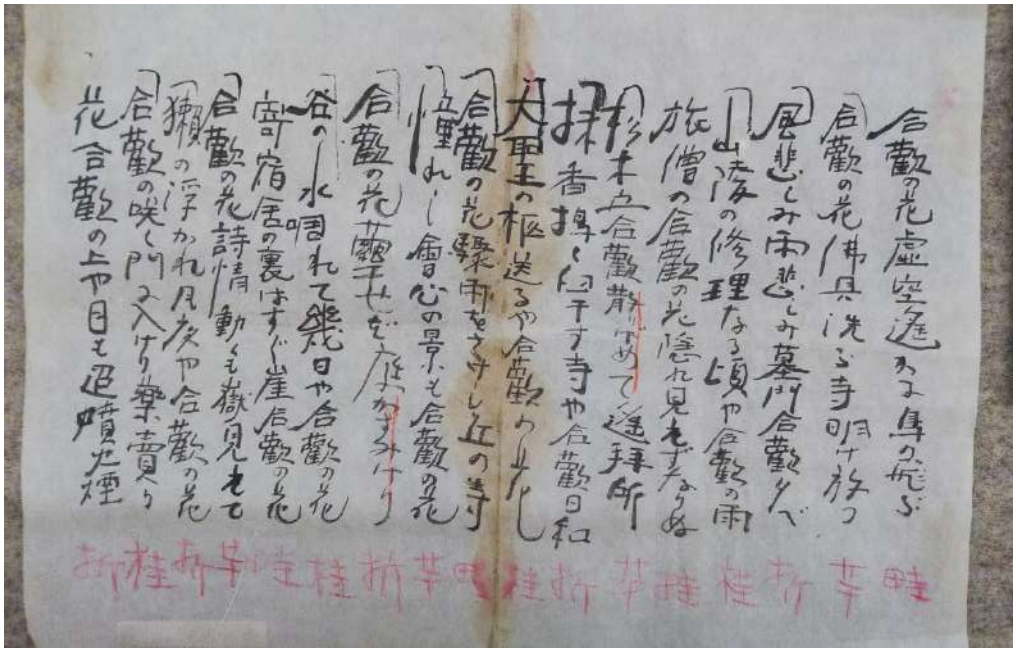
『日本俳句鈔』



【瀧井孝作『俳人仲間』より抜粋】

深山会の句作





第四章　明治四十二年七月十六日碧梧桐歓迎句会出席者の経歴(二十三名)

河東　碧梧桐[かわひがしへきごとう]

明治六年(一八七三)二月二十六日～昭和十二年(一九三七)十二月一日

俳人。松山市生まれ。名は秉五郎。

正岡子規に師事し俳句革新運動に加わる。明治三十六年(一九〇三)ごろから新傾向俳句へ進む。旧習打破、真実探求、個性拡充の時代の風潮に刺激され全国を風靡する。四十二年(一九〇九)七月、続三千里の旅の途中、信州松本から高山へ来て若き日の瀧井孝作と出会い、孝作は歓迎句会で認められる。四十五年(一九一二)にも再訪し高山の俳句界に影響を与える。四十四年(一九一一)俳誌『海紅』を創刊。著書『碧梧桐俳句集』『新俳句』。(日本歴史人物事典)

【飛騨人物事典】

永田　吉右衛門[ながたきちえもん]

明治六年(一八七三)八月十五日～大正七年(一九一八)二月二十六日

初代高山町長・富商。高山の人。道俊の子。幼名は尚次。号を不及・五松庵。高山町長三期、大野郡会議員、衆議院議員を務め政界で重きをなす。また飛騨銀行頭取を始め濃飛農工銀行、飛騨電灯会社などの重役。俳句、茶道、弓道などを多趣味で、俳句では花陰会の一世宗匠となる。

【飛騨人物事典】

柚原　畦菫[ゆはらけいきん]

明治二十二年(一八八九)十一月二十七日～明治四十四年(一九一一)八月十九日

俳人。高山の人。畦三と称する。畠太郎の五男で柚原吉右衛門の養子。花蔭会の俳人で、瀧井孝作に俳句の手ほどきをする。入営後、朝鮮の咸南道の憲兵守備隊に転属し現地で死去。

【飛騨人物事典】

瀧井　孝作[たきいこうさく]

明治二十七年(一八九四)四月四日～昭和五十九年(一九八四)十一月二十一日

小説家・文化功労者。高山町空町(現大門町)生まれで東京都八王子市に居住。号は折柴。

河東碧梧桐に師事し俳句の道に入った。大正八年(一九一九)時事新報記者になり、このころから芥川竜之介、志賀直哉らの知遇を得て文筆活動が旺盛となり『飛騨高山』などの短篇小説や随筆を次々に発表。昭和二年(一九二七)代表作『無限抱擁』発表。『野趣』で読売文学賞(昭和四十三(一九六八))。

『俳人仲間』で日本文学大賞(昭四九(一九七四))。作品は「瀧井文学」と評され、トツトツとした中にも独特の味わいを持つ。昭和十年(一九三五)の芥川賞創設から五十六年(一九八一)まで選考委員を務めた。俳句を生涯の友とし『瀧井孝作全句集』などがある。高山の観光ポスターに用いる「飛騨高山」の文字など六朝風の書法でも知られる。日本芸術院会員(昭三四)。高山市名誉市民(昭四六)。文化功労者(昭四九)。勲二等瑞宝章(昭五〇)。八王子市名誉市民(昭五〇)。(高山市史)

【飛騨人物事典】

小森　文助[こもりぶんすけ]

安政一年(一八五四)八月十四日～昭和三年(一九二八)四月一六日

高山の富商。小森家八代目。屋号は大阪屋。号は菊径・秋良。川上猷の弟で、七代治兵衛の没後養子となる。明治二十一年(一八八八)に開業した高山銀行の発起人の一人。高山の祭り屋台「五台山」を大修理した時、幸野媒嶺下絵の竜昇天図繍帳見送の費用を拠出。

【飛騨人物事典】

小森　耳風[こもりじふう]

明治十二年(一八七九)～昭和十九年(一九四四)十二月十九日

山桝会の俳人・酒造業。高山二之町生まれ。通称は春雄。高山町議会議員。同収入役など歴任。

【飛騨人物事典】

伊東清秋[いとうせいしゅう]

生年不詳～昭和十八年(一九四三)四月

俳人で雲橋社九世宗匠。高山下一之町の人。吉島掃月の弟子。昭和六年六月二十一日に立机式。

【飛騨人物事典】

杉下　守中[すぎしたしゅちゅう]

明治一年(一八六八)六月二十八日～昭和二十年(一九四五)十月十六日

画家。国府村宇津江生まれで高山市島川原町に居住。木翁の長男。本名は元次郎。号を石泉。字は真道。高山学校師範学科卒。明治十九年金桶小学校長。二十三年ごろ家業の材木商を継いだが、四十五年に家業をやめて画と漢詩に専念。京都の前川文嶺に北画を学び、南画に転じてからは独学。中央の書家や画家に知己が多く、高橋泥舟、横山大観らが飛騨に遊ぶ時には必ず守中を訪れた。高山で画の同好会「山高水長会」を主宰。高山町議を三期務めた。著書『独来独居』など。

【飛騨人物事典】

西本　小夢[にしもとしょうむ]

慶応三年(一八六七)十月二十六日～昭和四年(一九二九)二月二十四日

医師・俳人。古川生れ。本姓は熊崎で高山二之町の西本治郎兵衛の養子。名は達郎。号は雲心庵小夢。

金沢甲種医学校卒。明治二十六年(一八九三)頃高山で開業。大野郡会議員同郡石会長、高山伝染病院主任など歴任。雲橋社十一世で花蔭会の宗匠。句集『みちの落葉』。(高山医師会史)

【飛騨人物事典】

福田　吉郎兵衛(鋤雲)[ふくだきちろべえ(じょうん)]

明治一年(一八六八)五月二十六日～昭和二十三年(一九四八)九月二十七日

高山町長・俳人。高山市大新町の人。吉郎兵衛(敦雄)の長男。幼名は耕作。号を鋤雲。斐太中学、東京専門学校卒。

家業の丸福魚市場を継ぎ、春慶漆器問屋を開業して東京、大阪などへ販路を拡大した。高山町議、岐阜県議を経て、大正一～九年高山町長を務めた。飛騨産業銀行の設立発起人の一人。

旧派の俳人だったが、河東碧梧桐の来高(明四二)を機に新派へと転じ、同年長瀬素烏瓶らと「笹魚吟社」を創立。大正三年弟の夕咲らと同人誌「ツチグモ」を創刊した。

【飛騨人物事典】

日下部　雨外[くさかべうがい]

生没年不詳

雲橋社十世宗匠・素封家。高山の人。大正五年(一九一六)に雲橋社の文机を西本小夢に譲る。千家・堀之内宗完から茶道を学ぶ。

【飛騨人物事典】

柚原　淇澳[ゆはらきおう]　明治八年（一八七五）一月十二日～大正十三年（一九二四）

俳人・富商。高山上二之町の人。初名は熊造で吉右衛門を襲名。花陰会の俳人で中心的な人物の一人。【飛騨人物事典】

長瀬　壺仙[ながせこせん]　明治二年（一八六九）～昭和十三年（一九三八）二月十二日

俳人・茶商。高山一之町の人。名は茂八郎。号を木強・茶仏庵。本姓は前越。加藤趫翁から俳句の指導を受ける。明治三十一年に蕉習社を花陰会と改めて、後に二世宗匠。やまずみ会の創設メンバー。【飛騨人物事典】

柿下　清六[かきしたせいろく]　明治九年（一八七六）四月二十一日～昭和二十年（一九四五）十二月十四日

高山市議。高山下二之町の人。号は青縁。斐太中学卒。薬種技術を研究し薬種問屋を創業して財を成した。明治から大正にかけて四期高山町議を務め、議長一回。高山が市制を敷いた昭和十一年の市議選で当選し初代議長。飛騨産業銀行専務取締役、飛騨電灯監査役などを歴任。俳句は雲橋社中だったが、商人を中心とした花陰会にも属した。

昭和六年の田中竹崖との共著『雲橋社略史』は、飛騨の俳史を語る上で貴重なもの。【飛騨人物事典】

田中　貢太郎[たなかこうたろう]　慶応二年（一八六六）十一月一日～昭和十一年（一九三六）十二月二十七日

教師。高山の人。号は林崖。字役人の家に生まれる。県立華陽学校初等師範科卒。明治二十年の高山高等小学校長を始めとして三十五年間小学校教育に携わる。退職後も昭和八年まで高山高等女学校で教壇に立つ。大正十四年完成の「大野郡史」編集委員の一人。俳句をたしなむ。【飛騨人物事典】

長尾　桃雨[ながおとうう]　明治七年（一八七四）～昭和八年（一九三三）十月五日

俳人・高山向町の雑貨商。幼名は駒吉。号は十五庵。通称を新六。五松庵不及門。明治末期から昭和にかけて蕉習社(のちの花陰会)の中心として活躍。遺句集『葉かくれの梅』。享年六十一。

【飛騨人物事典】

上木 象雨[うわぎしょうう]　生没年不詳

俳人・地方紙記者。高山上二之町に住む。雨台の子。本名は捨三。漁南楼と称する。勇直次郎と伊助が発行した『高山新報』『高山タイムス』の記者。長唄「四季の高山」は象雨の作詞。俳句は花陰会と水音社。文房具店を営む。

【飛騨人物事典】

真木 半一郎[まきはんいちろう]　明治十七年(一八八四)～昭和九年(一九三四)八月四日

俳人。高山町の人。号は帆逸・東衝子。明治末年に『高山新報』『斐太毎日新聞』記者。『岐阜県飛騨国大野郡史』の編集委員。明治末年から昭和初期までの俳業は新傾向俳句を好み「飛毎事吟」に集約されたといえる。

【飛騨人物事典】

赤保木 竹友[あかほぎちくゆう]　明治十七年(一八八四)～昭和九年(一九三四)八月四日

地方紙記者。川原町に住む。本名は赤保木寅之助。明治三十九年(一九〇六)創刊の『高山新報』に参加。花陰会で俳句を学び同四十四年に同会幹事。晩年は茶道の宗匠として伊予宇和島に移る。

【飛騨人物事典】

勇 桂雪[いさみけいせつ]　明治十一年(一八七八)九月二十五日～昭和四年(一九二九)二月十九日

俳人・地方紙発行。高山堀端の生まれ。幼名は直次郎。通称は伊助。号を橋東庵桂雪。花陰会の宗匠・永田不及を補佐し、不及の没後は雲橋社の宗匠・西本小夢を花陰会の宗匠に兼立し了解の発展を図る。瀧井孝作、上木象雨らと共に河東碧梧桐の指導を受ける。明治三十九年四月五日『高山新報』を発行。廃刊後の大正三年から『高山タイムス』。同六年に飛騨日報と合併。大野郡史編纂委員。

【飛騨人物事典】

住　広造[すみひろぞう]

明治十三年(一八八〇)八月二十一日～昭和三十九年(一九六四)十二月十二日

斐太中央印刷(株)社長。高山市下三之町の人。大正三年創刊『飛騨史壇』の編集人。大正十二年斐太中央印刷を創業。同社創業以前の明治四十一年から『飛州志』『飛騨遺乗合合府』『斐太後風土記』など先人の残した資料を順次刊行。昭和二十九年、飛騨印刷(協)が発足し、初代理事長。遺志で郷土資料一，一〇〇点などが高山市へ贈られ「住香艸文庫」となった。【飛騨人物事典】

小鳥　良々[おどりりょうりょう]

明治二十四年(一八九一)七月十二日～昭和二十一年(一九四六)九月十五日

俳人。高山市本町の人。本名は芳郎。号を芙蓉子。河東碧梧桐に師事し、明治の終わりから大正にかけて瀧井孝作や福田夕咲の兄・鋤雲らと交流。新傾向俳句結社「素顔吟社」の同人。名句を残したが晩年は句作から遠ざかった。東京で客死。良々の句集『素顔』と遺稿集『素顔』を実弟の小鳥節造が刊行。【飛騨人物事典】

岩谷　山梔子[いわやくちなし]

明治十六年(一八三三)一月三十日～昭和十九年(一九四四)一月四日

俳人、俳画家、編集者。青森県青森町(現青森市)出身。名を健治。複号に木丹亭、黙堂など。著書に『自選乙字俳論』。十代でカリエスに罹り療養する中で俳句を始め、地元の俳句結社「不来会」に参加、二十歳で高浜虚子の「ホトトギス」に入会、河東碧梧桐が選者であった新聞「日本」にも投句する。碧梧桐の行脚(第一次「三千里」)の際碧梧桐と会い傾倒。…(中略)…明治四十三年(一九一〇)には大谷句仏の俳句結社「懸葵」にも入会。京都に住み、俳誌『懸葵』の編集者となる。以来大須賀乙字の『自選乙字俳論』や浪化の『浪化俳句集』、『本願寺歴代法子句纂』など多くの句集や俳論集を編纂する。【ウィキペディアより抜粋】

中谷芋ノ子(芋子)[なかたにいものこ(うし)]

生没年不詳

詳細不明。河東碧梧桐に呼ばれたことにより、号を「芋子(うし)」と変えた。

第五章　『ホトトギス』、『日本及日本人』などへ飛騨からの投句の様子

『ホトトギス』八月号「地方俳句界」の欄に掲載

深山会(飛騨高山飛騨高山二之町柚原畦三報)

徳川の鉄砲蔵や鴨足草　折柴

水撒けば低く虹せり鴨足草　折柴

『日本及日本人』の八月十五日号の、碧梧桐先生の「続一日一信」に飛騨高山紀行文が掲載。

七月十五日の日記に私達の句が選び出された。

小集

葉柳や水濁す子等川上に　芋子

漁暦になき赤汐や夏柳　折柴

葉柳や朝靄に打つ紙砧　鋤雲

御判戴く椽静かさや合歓の花　畦菫

分水起工水量る頃や夏柳　碧梧桐

某月某日　句会　席題「夜長・蜩」ニ題五句

会場　福田屋

参加者　福田　鋤雲

柚原　畦菫

中谷　芋子

小鳥　芙蓉子

瀧井　折柴

『日本及日本人』の九月十五日号の「各地俳況・喜谷六花選」に掲載

深山会(飛騨高山瀧井孝作報)

蜩や杣の酒汲む山名残　芋子

蜩や馬の賦役もふれ歩く　折柴

『ホトトギス』の十月号「地方俳句界・岡本松濱選」

深山会(飛騨高山)

蜩や森去る子等の唄淋し　芋子

蜩や日に二度通ふ小荷駄馬　芙蓉子

雨に著きし飛騨高山の祭かな　畦菫

咳唾皆玉なす百句夜長人　鋤雲

幾年の夜長に凹む砧盤　折柴

九月十九日　深山会「子規忌」

題　「秋の雨・秋の山・芒」五句

会場　東山　宗猷寺

参加者　福田　鋤雲

柚原　畦菫

中谷　芋子

小鳥　芙蓉子

瀧井　折柴

この子規忌句会の句稿を投稿。『日本及日本人』十一月一日号の「各地俳況・大須賀乙字選」

深山会(飛騨高山瀧井折柴報)

焼きし思ふ惜しき文あり秋の雨　芋子

越す人の三泊り山の宿砧　芙蓉子
白き虫群れ飛ぶ樟や秋の山　畦菫
浄火磨る木を採りに行く秋の山　折柴

『ホトトギス』十一月号「地方俳句界・岡本松濱選」
深山会(飛騨高山柚原畦菫報)
鹿追へば兎出でたる薄かな　鋤雲
武器埋めし大盤石や花芒　折柴
中塚一碧楼の選稿の中に
角力とりしあとの輪にふる秋の雨　芋子

『日本及日本人』十二月一日号「日本俳句」の渡り鳥に選ばれた。
峡過ぐと帆の丈長や渡り鳥　折柴

明治四十三年
『ホトトギス』新年号　碧梧桐選の募集句に
ひとり剥く憂ひに長し梨の皮　畦菫

明治四十五年
六月八日から十一日まで、河東碧梧桐が『日本及日本人』に連載中の「日本の山水」の取材に来高の旨、
塩谷鵜平を通じて福田鋤雲に報せがあり、急遽歓迎の準備に取り掛かる。

六月　八日(九日との記述もある)
宿舎　二之町　長瀬旅館
歓迎晩餐会　川原町　岩下(月波楼)
句会題　「朴の花・夏柳・蚊」
参加者　河東　碧梧桐
川西　和露
岩谷　山梔子(句会には不参加)
福田　鋤雲
小鳥　良々(芙蓉子)
川島　桜南
瀧井　折柴
岩瀬　菊字
林　もみじ

六月　九日(十日との記述もある)
歓迎句会　西之一色町　松泰寺
句会題　「朴の花・夏柳・蚊」
参加者　河東　碧梧桐
川西　和露
岩谷　山梔子
福田　鋤雲
小鳥　良々(芙蓉子)
川島　桜南
瀧井　折柴
岩瀬　菊字
林　もみじ

碧梧桐先生選句(大正元年九月号俳誌『層雲』の地方俳況欄に掲載)
後の竹枝の津の葉柳の売茶亭　鋤雲
葉柳の紙屋川羽白。鳥の雨　同

一瀬二平ラ　朴咲きぬ釣魚香に立ちて　同
蚊鳴くにも今日の大瀑うつつ聞く　同
そのかみ斧磨ぎの岩鏡なくて夏柳　折柴
近かまさり花と知る朴に鳩啼いて　同
船に幌を島庁の旗日夏柳　同
栃の樹齢も揣摩し来つ葉柳の宿　和露
朴の花に白映えり模範林やある　同
高原女に咲くは朴の花桑摘む日　山梔子
朴の花も見ずなれば少し野広くて　同
蚊の宿の葉蕪漬に色あらぬ　良々

第六章　唐井清六『瀧井孝作ノオト― 碧梧桐をむかえての高山での句会 ―』

「日本及日本人」に「日本の山水」を連載中の河東碧梧桐は、明治四十五年六月八日、飛騨の白川村取材のため高山を訪れる。それより三年前の四十二年七月、「続三千里」の旅の途中、単身立ち寄って以来の再訪であった。今回は門下の神戸の川西和露、青森の岩谷山梔子を同伴。

高山ではただちに福田鋤雲、瀧井折柴、小鳥良々、岩瀬菊字、川島桜南らが集まり、歓迎会がひらかれ、翌九、十日と料亭月波楼で句会が催されることになる。のちに高山で俳誌「ツチグモ」をおこす人たちである。

句会は、夏柳、朴の花、蚊の三つの席題のもとにおこなわれている。次に掲げるものはそのときの記録であるが、句数はきめられず、各人任意に作句したもののようである。

瀧井孝作(折柴)はこの時十八歳、高山の魚問屋に奉公する少年であったが旺盛な句作を示し、互選においても碧梧桐につぐほどの高い点数を集めていることが注目される。

碧梧桐は高山に三泊して十一日に和露、山梔子を伴って徒歩で白川に向かっている。碧梧桐はこのときのことを「白川越え」として同年七月一日号の「日本及日本人」に発表、句会の成果も十二句を選んで、大正元年九月号の「層雲」の「四方欄」に掲載している。

瀧井孝作の自伝長篇「俳人仲間」も当然このときのことにふれるが、この資料にもとづいて執筆されたものではないようで、記録の語るものと「俳人仲間」との間にはかなりな異同と大幅な省略とが認められる。

翻刻に当っては、文字は大体現在使われているものに直したほか、理解の助けとなるよう人名など括弧によって適宜編者が補った。

発表をこころよくお許し下さった所蔵者の福田鐐造氏をはじめ、なにかとお力添え頂いた高山在住の大野政雄氏、小鷹奇龍子氏に厚くお礼を申し述べたい。

第一節　壬子六月九日　碧師来高紀念　於月波楼上

夏柳　作者選者共八名　七十句

投　句

一

湯返り途の小蛇むくろ夏柳岸　折柴
艶跡伝ふ葉柳廓婀夫住める　同
そのかみ斧磨ぎの岩鏡なくて夏柳　同
鹿羊馳駆して園丁の軽衣夏柳　同
娶るに葉柳影濃き日かな水祝ひ　同
舟に幌を島庁の旗日夏柳　同
大野昔路夏土取場柳陰　同
淵川の舟がひら〳〵町や夏柳　同
雨の葉柳仰ぎ寒む袋蛇穴仕事　同
葉柳の啼あり江流岩多き　同
由来啾や小半時夕立に此柳　同

二

門衛に家族ありて柯茂るなり　良々
葉柳の鳥居筋酒肆に牡丹ある　同
襖組〻子洗ぐ夏柳日表なる　菊字
江慣る頃髯磨ぐ日宿の葉柳に　同
葉柳や用水桶は役場より　同
舟運税国かはれば葉柳の河暑き　折柴
獣飼ふに窟造る家構夏柳　同
絶誦す晩唐名残り葉柳の詩句　桜南
一顆改刻語の奇に過ぐと葉柳書屋　同
鮎期迫る方柳の船茶讌にや　鋤雲
簀干すものに糖海老や葉柳の河岸　同

三

標榜の小京華葉柳に駕迎ふ日　桜南
流連両岸に葉柳文狂となり　同
道路教育の塗板迄葉柳に日いくつ　鋤雲
蚕の景気も葉柳に校舎普請あり　同
繃帯せし日の葉柳に黙談す　良々
寺訪ふて留守を葉柳に虫飛べり　同
素人画相酬ふ鉱泉客夏柳　折柴
湾を思はす運河葉柳つゞく町　同
国境越えて凡な川葉柳の駅　和露
葉柳の窯場見て一行と城山へ　良々
葉柳の串魚の宿泊らで行くや　同

四

葉柳や貯水挽き墜す庫谺　菊字
稽古琴の根弛みを言ふ葉柳の長屋筋　鋤雲
葉柳の紙屋川羽白〻鳥の雨　同
普請木を積む霖雨石も葉柳に　碧梧桐
葉柳の旗亭にて硯乾かぬ日　良々
奈良の雨の葉柳に二信長きせり　同

五

健啖同窓葉柳に大鰻素焼きせり　桜南
肉声太きに夏柳短艇下る　和露
葉柳に合歓咲く寺後廓道のあり　良々
葉柳に栗匂ふ薮のおどろの夜　碧梧桐
底萩原の運材酒場夏柳　折柴

茂柳が町城埋むと見つ平の家訪ふ　同
芝居丸つぶれを葉柳の釣堀さかる　良々
襤褸市脱け来て葉柳に鶤鶏を見し　鋤雲
法書親しめば筆洗欲しき葉柳の荘　桜南
暮れの徜徉君と葉柳の杭州を　同
山漁具の弦しらべ葉柳折りて　折柴
足滑りも葉柳の網ひきずり魚市　同

六

簾葉柳宮島は杓子閑に雲無き日　折柴
酒楼にて対話聞え夏楊あらぶる日　同
葉柳に高桑や裸学校ある　碧梧桐
後の竹枝の津の葉柳の売茶亭　鋤雲
濠の全景に船片寄する洲の夏柳　同
下呂は坂町上呂は橋の夏柳　碧梧桐
広く掃く日の葉柳に書信待たずなり　良々
或る日は穴居見に葉柳を画家とあり　同
汐招き燕に櫓揃へ夏柳　折柴
植林の家葉柳は明き地物干場　同
葉柳に暮るゝ路地撒水車も捨てしに　菊字

七

何煙らす葉柳に鯉を待つ昼餉　碧梧桐
葉柳に井桁見る一位細工所か　和露
杉立つ山葉柳の池や里分つ　碧梧桐
機場三年の倹もせし葉柳の埃　和露
葉柳の狐雨瓦選り悩む　鋤雲
栃の齢も揣摩し来つ葉柳の宿　和露
宮茶屋に雨晴らす土偶が葉柳に　碧梧桐
架橋兵風を打つ杭や夏柳　菊字

選句

［碧選］

そのかみ斧磨ぎの岩鏡なくて夏柳　折柴
栃の樹齢も揣摩し来つ葉柳の宿　和露
後の竹枝の津の葉柳の売茶亭　鋤雲
船に幌を島庁の旗日夏柳　折柴
葉柳の紙屋川羽白〃鳥の雨　鋤雲

［和露選］

底萩原の運材酒場夏柳　折柴
何煙らす葉柳に鯉を待つ昼餉　碧梧桐
下呂は坂道上呂は橋の夏柳　同
宮茶屋に雨晴らす土偶が葉柳に　同
葉柳に高桑や裸学校ある　同

［鋤雲妄］

架橋兵風を打つ杭や夏柳　菊字
葉柳に井桁見る一位細工所か　和露
国境越えて凡な川葉柳の駅　同
下呂は坂道上呂は橋の夏柳　碧梧桐
奈良の雨の葉柳に二信長きせり　良々

［折柴選］

葉柳に栗匂ふ藪のおどろの夜　碧梧桐
襤褸市脱け来て葉柳にシャモを見し　鋤雲
機場三年の倹もせし葉柳の埃　和露
栃の齢も揣摩し来つはやなきの宿　同
宮茶屋に雨晴らす土偶が葉柳に　碧梧桐

［良々選］

底萩原の運材酒場夏柳　折柴
何煙らす葉柳に鯉を待つ昼餉　碧梧桐
船に幌を島庁の旗日夏柳　折柴
簾葉柳宮島は杓子閑に雲なき日　同
汐招き燕に櫓揃へ夏柳　同

［桜南選］

江慣る頃髯磨ぐ日宿の葉柳に　菊字
葉柳の串魚の宿泊らで行くや　良々
葉柳の旗亭に硯乾かぬ日　同
底萩原の運材酒場夏柳　折柴
杉立つ山葉柳の池や里分つ　碧梧桐

［菊字妄選］

底萩原の運材酒場夏柳　折柴
広く掃く日の葉柳に書信待たずなり　良々
簾葉柳宮島は杓子閑に雲無き日　折柴
宮茶屋に雨晴らす土偶が葉柳に　碧梧桐
船に幌を島庁の旗日夏柳　折柴

［もじぢ選］

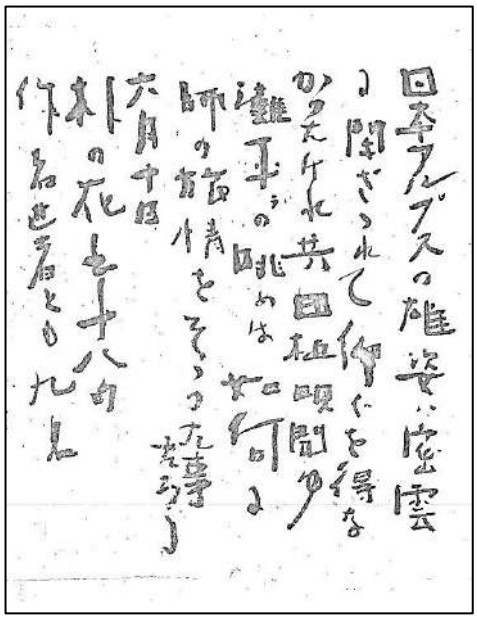
国境越えて凡な川葉柳の駅　和露
法書親しめば筆洗欲しき葉柳の荘　桜南
濠の全景に船片寄する洲の夏柳　鋤雲
杉立つ山葉柳の池や里分つ　碧梧桐
何煙らす葉柳に鯉を待つ昼餉　同

得票

	和露	鋤雲	桜南	菊字	良々	もみぢ	折柴	碧
鋤	○○			○	○			○
良							○○○○	○
も	○	○	○					○○
桜				○	○○		○	○
菊					○		○○○	○
折	○○	○						○○
碧	○	○○					○○	
和							○	○○○
	6	4	1	2	4		11	12

第二節　壬子六月十日　於松泰寺

（原本資料・福田鐐造氏蔵資料より）



日本アルプスの雄姿ハ密雲
に閉ざゝれて仰ぐを得な
かったけれ共田植唄聞ゆ
灘平ラ の眺めは如何に
師の旅情をそゝった事
だろう

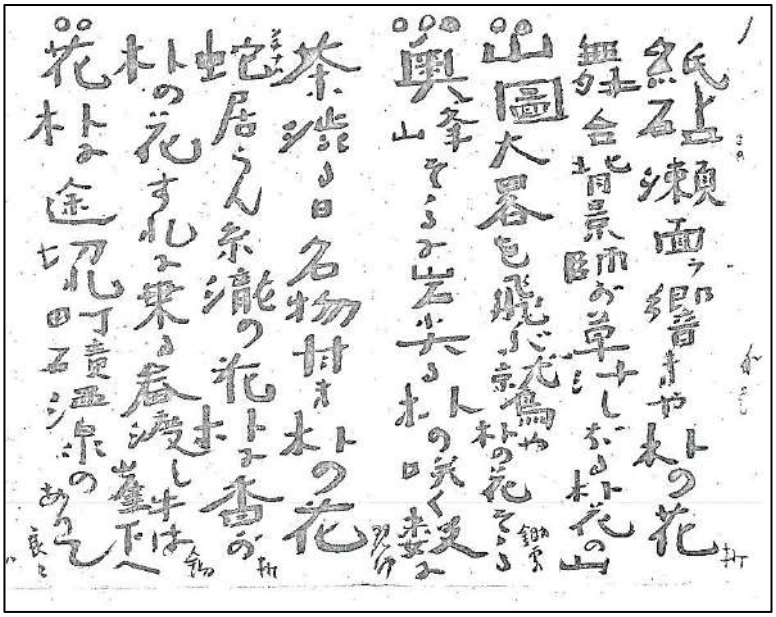
六月十日

朴の花七十八句

作者選者とも九名

一

投句



紙砧瀬面ラ 響きや朴の花　　折柴

舞台背景師が草汁しぼる朴花の山　　同

山図大略を飛ぶ鷲や朴の花そゝる　　鋤雲

奥峰そゝるに岩尖る朴の咲く数に　　碧梧桐

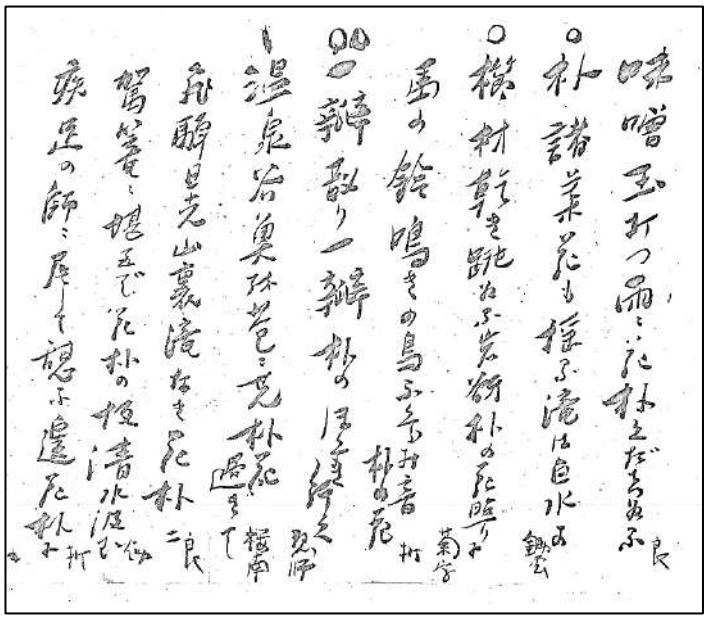
茶渋る日名物甘き朴の花　　折柴

蛇（クチナハ） 居らん糸瀧の花朴に香が　　同

朴の花すれに乗る畚渡し牛は崖下へ　　鋤雲

※畚・・もっこ、ふご

二

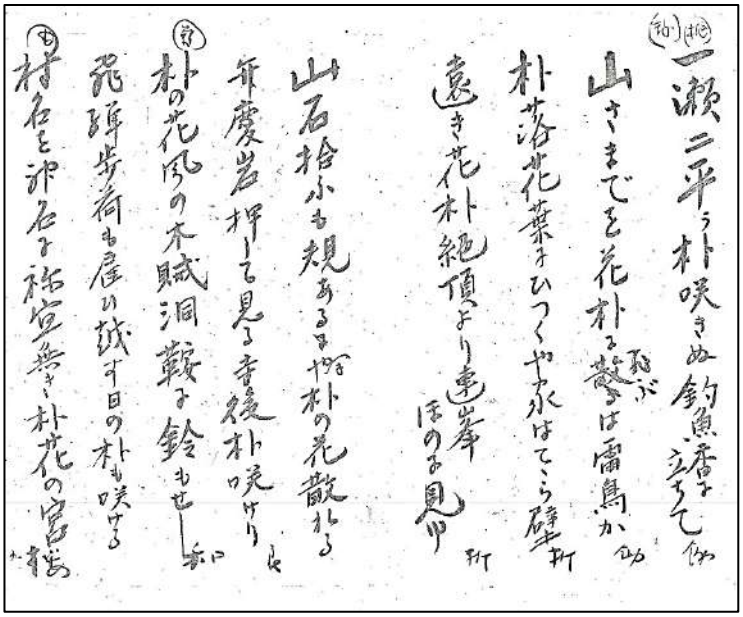


花朴に途切れ町磧温泉のありて　良々

味噌玉打つ雨に花朴くだけぬる　良々
朴諸葉花もゆる滝は白水か　鋤雲
櫛材乾き跳ぬる岩谺朴の花照りに　菊字
馬の鈴鳴きの鳥ふくらみ音朴の花　折柴
一弁散り一弁朴のほぐれ行く　碧梧桐
温泉谷魚を苞にせん朴花過ぎて　桜南
飛騨日光山裏滝なき花朴に　良々
駕籠に堪えで花朴の坂清水汲む　鋤雲
疾足の師に尾して憩ふ遑花朴に　折柴

※苞（ほう）：花あるいは花序の付け根に出る葉。芽やつぼみを覆って花を保護する。
※遑：ひま

三

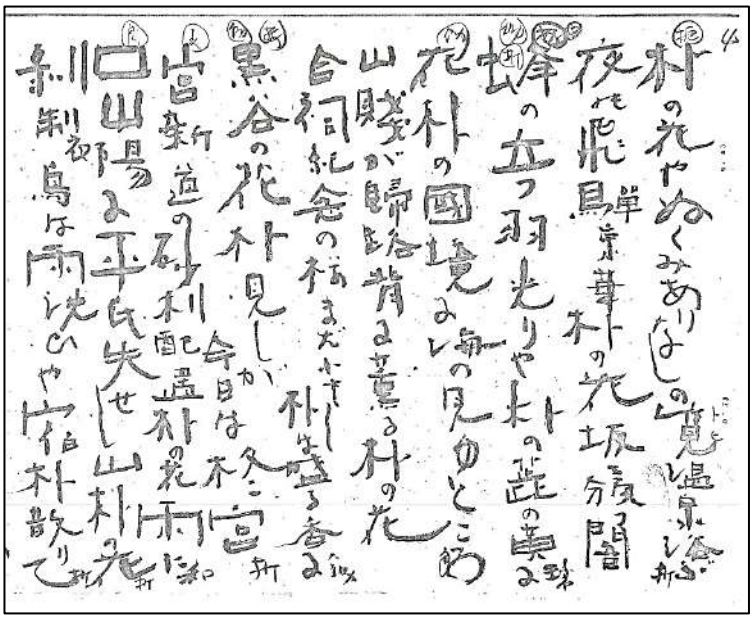


一瀬二平ラ朴咲きぬ釣魚香に立ちて　鋤雲
山さまでを花朴に飛ぶは雷鳥か　同
朴落花葉にひつくや家はてゝら壁　折柴
遠き花朴絶頂より連峰ほのぼの見ゆ　同
山石拾ふも規あるやに朴の花散れる　同
弁慶岩押して見る寺後朴咲けり　良々
朴の花風の木賊洞鞍に鈴もせし　和露
飛騨歩荷も雇ひ越す日の朴も咲ける　同

※木賊洞（とくさぼら）：久々野の地名

四

村名を神名に祢宜無き朴花の宮　桜南



朴の花やぬくみありなしの寛温泉浴ぶ　折柴

夜の飛騨京華朴の花坂に頒つ閻　同

蜂の立つ羽光りや朴の蕋の黄に　碧梧桐

花朴の国境に海の見ゆところ　良々

山賤が帰路背に薫る朴の花　同

※山賤（やまがつ）：樵や猟師　山で生業をうる人

合祀紀念の桜まだ小さく朴は盛る香る　鋤雲

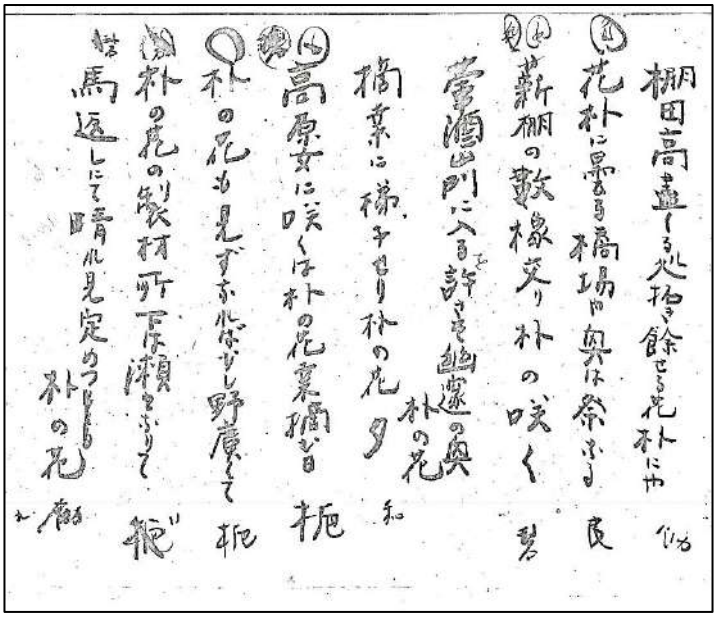
黒谷の花朴見しが今日は柊宮　折柴

宮新道の砂利配置朴の花雨に　和露

五

口山陽に平氏失せし山朴の花　折柴

剥製鳥は雨洗ひや宿朴散りて　同



棚田高尽くる処拓き余せる花朴にや　鋤雲

花朴に曇る橋場や奥は祭なる　良々

薪棚の数栃交り朴の咲く　碧梧桐

葷酒山門に入るを許さず幽邃の奥朴の花　和露

※葷酒（くんしゅ）山門に入るを許さず　ことわざ

（「葷」は韮（にら）・葱（ねぎ）・大蒜（にんにく）などの香りの強い野菜）や酒は僧侶の心を乱すから寺にもちこんではいけない。

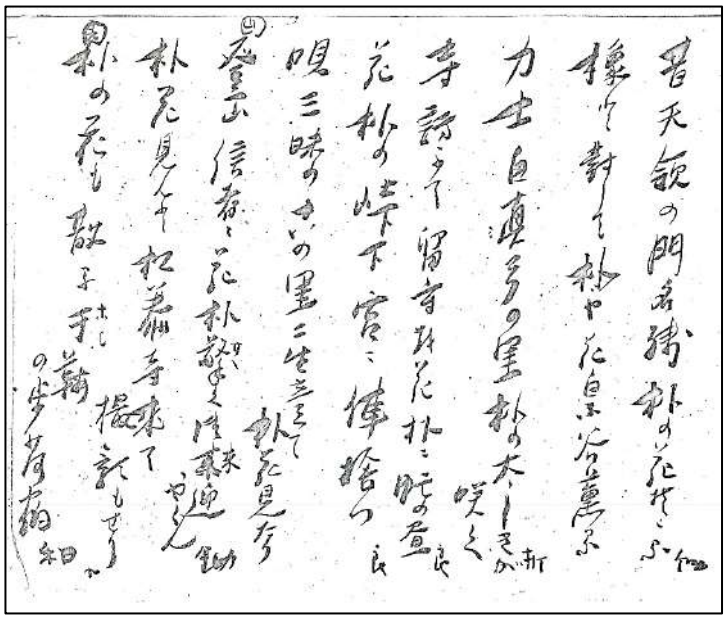
摘葉に梯子せり朴の花夕　同

高原女に咲くは朴の花桑摘む日　山梔子

朴の花も見ずなれば少し野広くて　同

六

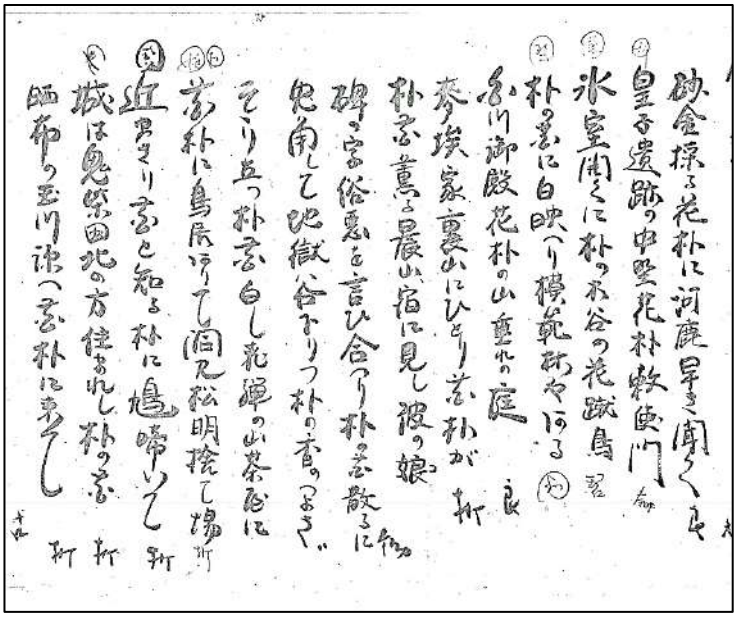
朴の花の製材所下は瀬となりて　同
馬返しにて晴れ見定めつ朴の花　鋤雲



昔天領の門名残朴の花そゝる　鋤雲
栃と対して朴や花白ふ谷薫る　同
力士白真弓の里朴の太しきが咲く　折柴
寺訪ふて留守を花朴に虻の昼　良々
花朴の峠下宮に俥捨つ　同
唄三昧のこの里に生立ちて朴花見たり　鋤雲
登山信者に花朴撃く御来迎やらん　同
朴花見んと松泰寺来て撮影もせり　和露

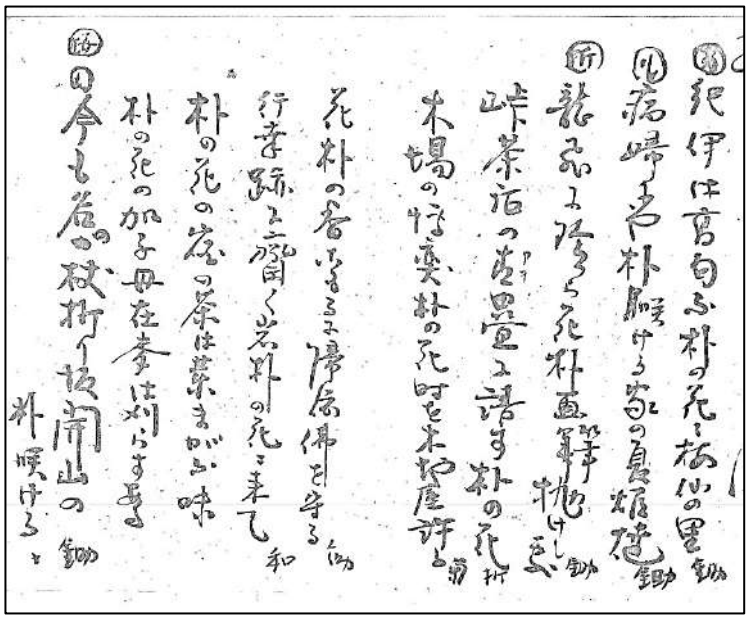
七

朴の花も散る干鞍の歩荷宿　同



砂金採る花朴に河鹿早き聞く　良々
皇子遺跡の中野花朴勅使門　鋤雲
氷室開くに朴の木谷の花蹴鳥　碧梧桐
朴の花に白映へり模範林やある　和露
白川御殿花朴の山垂れの庭　良々
麦埃家裏山にひとり花朴が　折柴
※麦埃（むぎほこり）：麦うちの時に出るほこり
朴花薫る晨山宿に見し彼の娘　同
碑の字俗悪を言ひ合へり朴の花散るに　鋤雲

兎角して地獄谷下りつ朴の香のつよさ　同
そゝり立つ朴花白し飛騨の山茶屋に　同
花朴に鳥居ありて洞尺松明捨て場　折柴
近まさり花と知る朴に鳩啼いて　同
城は鬼柴田北の方住まれし朴の花　同
晒布の玉川跡へ花朴に来て　同

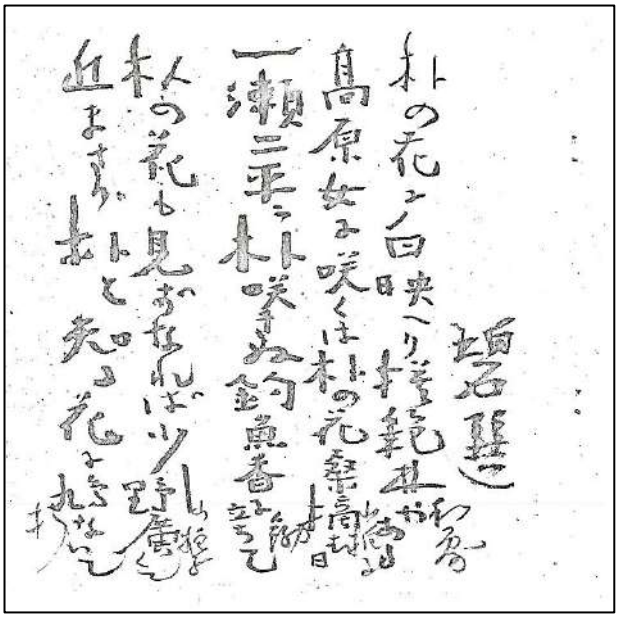


紀伊は高匂ふ朴の花に梅仙の里　鋤雲
病婦にや朴咲ける家の夏炬燵　同
竜飛に珍ら花朴画筆抛げし処　同
峠茶店の青畳に話す朴の花　折柴

木場の博奕朴の花時を木地屋許る　菊字
花朴の香こもるに帰依仏を守る　鋤雲
行幸跡に斎く岩朴の花に来て　和露
朴の花の宿の茶は薬まがふ味　同
朴の花の加子母在麦は刈らずある　同
今も名の杖折り坂開山の朴咲ける　鋤雲

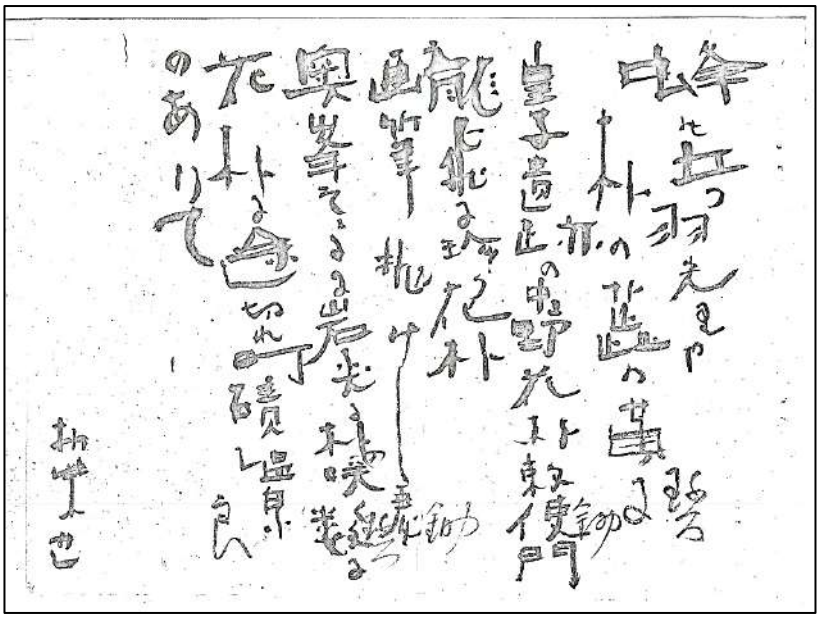
選句

碧選



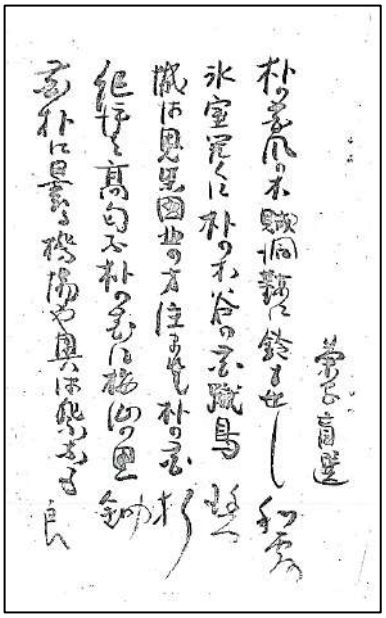
朴の花に白映へり模範林やある　和露
高原女に咲くは朴の花桑摘む日　山梔子
一瀬二平ラ　朴咲きぬ釣魚香に立ちて　鋤雲
朴の花も見ずなれば少し野広くて　山梔子
近まさり花と知る朴に鳩ないて　折柴

折柴選



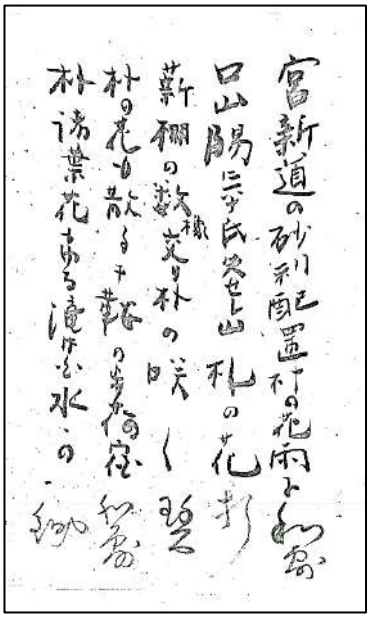
蜂の立つ羽光りや朴の蕋の黄に　碧梧桐
皇子遺跡の中野花朴勅使門　鋤雲
竜飛に珍ら花朴画筆抛げし処　同
奥峰そゝるに岩尖る朴の咲く数に　碧梧桐
花朴に途切れ町磧温泉のありて　良々

菊字盲選



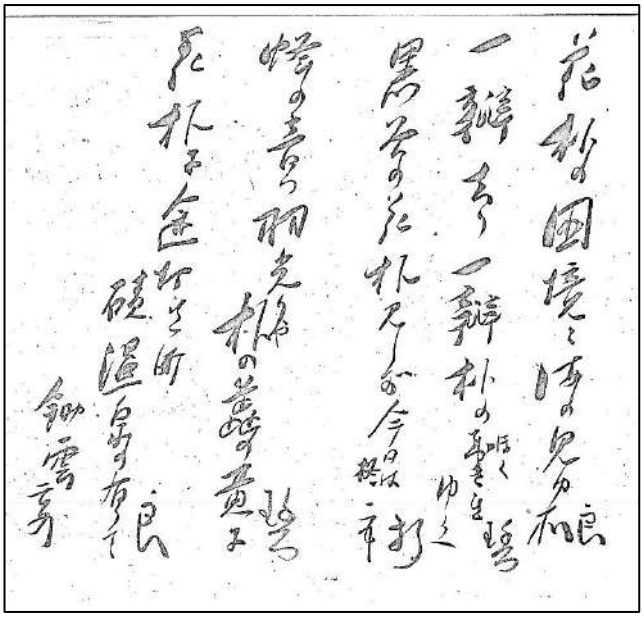
朴の花風の木賊洞鞍に鈴もせし　和露
氷室開くに朴の木谷の花蹴鳥　碧梧桐
城は鬼柴田北の方住まれし朴の花　折柴
紀伊は高匂ふ朴の花に梅仙の里　鋤雲
花朴に曇る橋場や奥は祭なる　良々

良々選



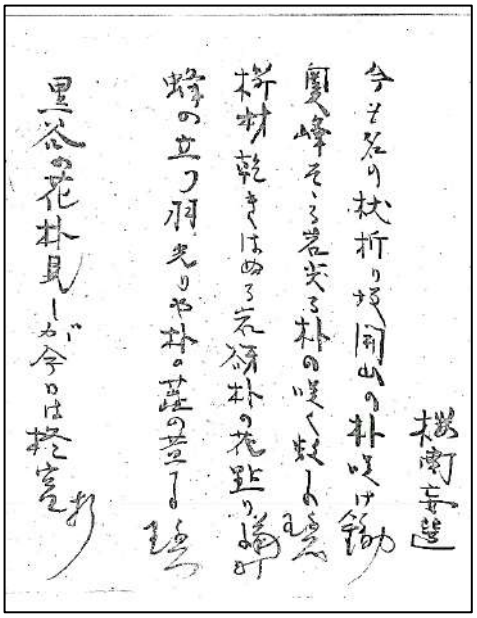
宮新道の砂利配置朴の花雨に　和露
口山陽に平氏失せし山朴の花　折柴
薪棚の数栃交り朴の咲く　碧梧桐
朴の花も散る干鞍の歩荷宿　和露
朴諸葉花もゆる滝は白水か　鋤雲

鋤雲妄



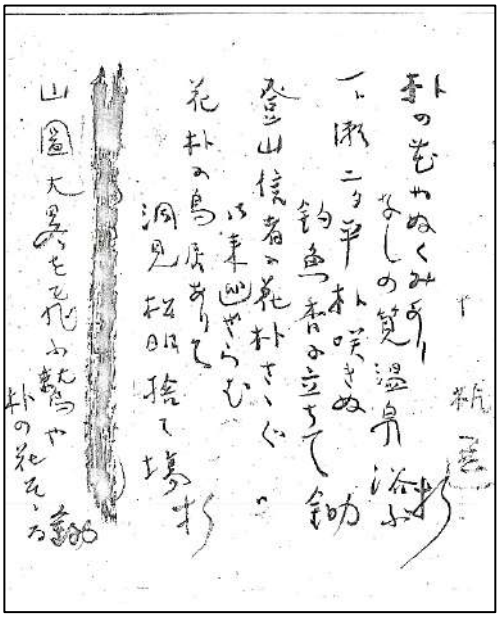
花朴の国境に海の見ゆ処　良々
一弁散り一弁朴のほぐれ行く　碧梧桐
黒谷の花朴見しが今日は柊宮　折柴
蜂の立つ羽光りや朴の蕋の黄に　碧梧桐
花朴に途切れ町磧温泉のありて　良々

桜南妄選



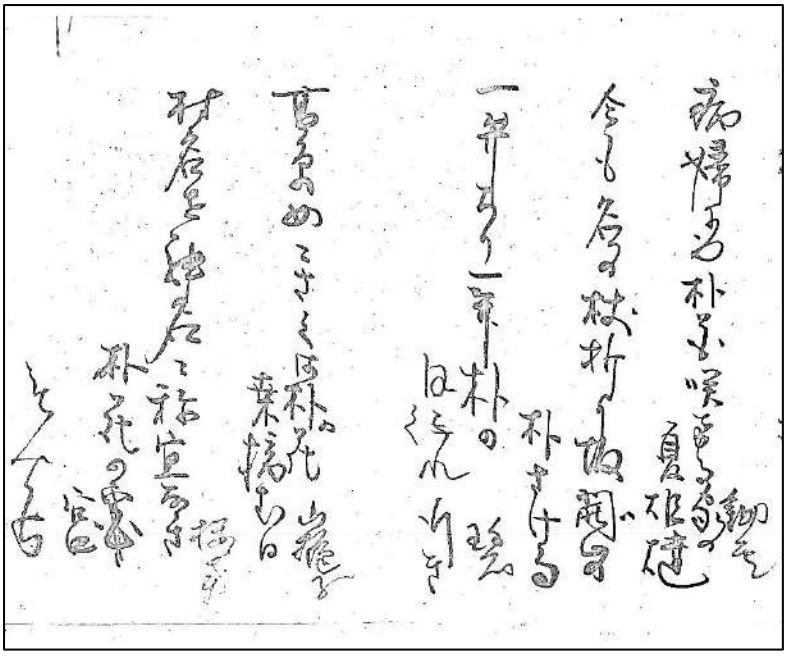
今も名の杖折り坂開山の朴咲ける　鋤雲
奥峰そゝるに岩尖る朴の咲く数に　碧梧桐
櫛材乾きはぬる岩谷朴の花照りに　菊字
蜂の立つ羽光りや朴の蕋の黄に　碧梧桐
黒谷の花朴見しが今日は柊宮　折柴

栀選



朴の花やぬくみありなしの筧温泉浴ぶ　折柴
一ト瀬二タ平朴咲きぬ釣魚香に立ちて　鋤雲
登山信者に花朴さゝぐ御来迎やらむ　同
花朴に鳥居ありて洞見松明捨て場　折柴
山図大略を飛ぶ鷲や朴の花そゝる　鋤雲

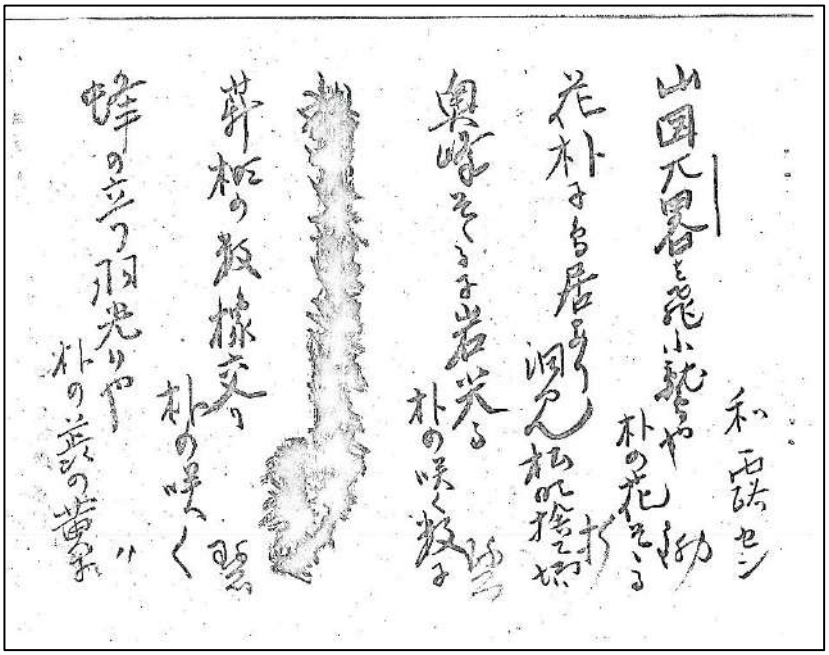
もじぢ選



病婦岩朴咲ける家の夏炬燵　鋤雲
今も名の杖折り坂開山の朴咲ける　同
一弁散り一弁朴のほぐれ行き　碧梧桐
高原女にさくは朴の花桑摘む日　山栀子

村名を神名に祢宜なき朴花の宮　桜南

和露セン



山図大略を飛ぶ鷲や朴の花そゝる　鋤雲

花朴に鳥居あり洞見松捨て場　折柴

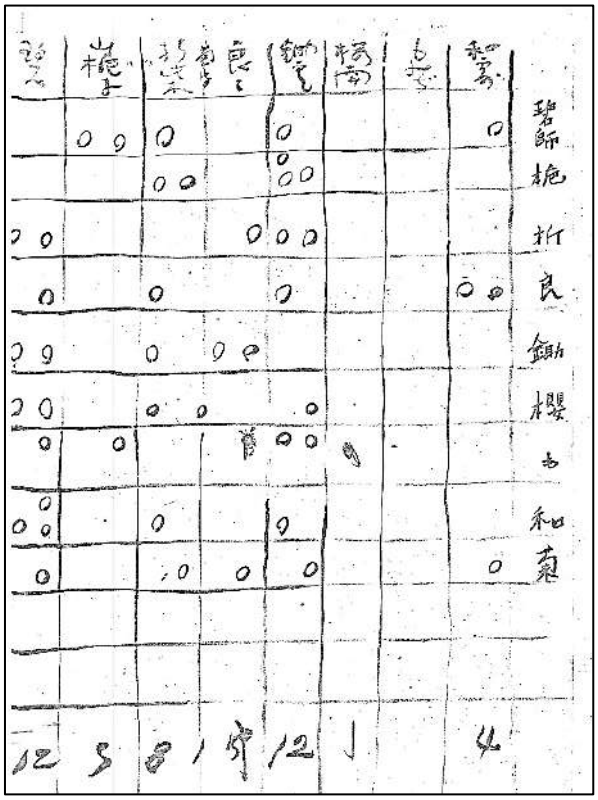
奥峰そゝるに岩尖る朴の咲く数に　碧梧桐

薪棚の数栃交り朴の咲く　同

蜂の立つ羽光りや朴の蕋の黄に　同

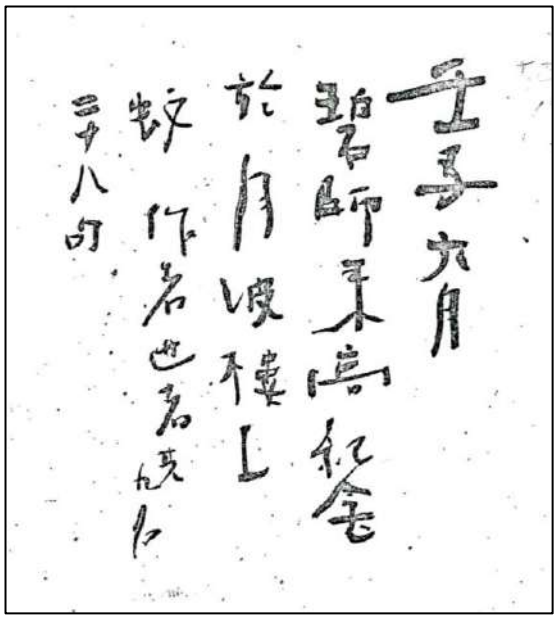
得票

	碧	山梔子	折柴	菊字	良々	鋤雲	桜南	もみぢ	和露
碧師		○○	○			○			○
梔			○○			○○○			
折	○○				○	○○			
良	○		○			○			○○
鋤	○○		○		○○				
桜	○○		○	○		○			
も	○	○				○○	○		
和	○○○		○			○			
菊	○		○		○	○			○
	12	3	8	1	4	12	1		4



第三節　壬子六月　碧師来高紀念　於月波楼上

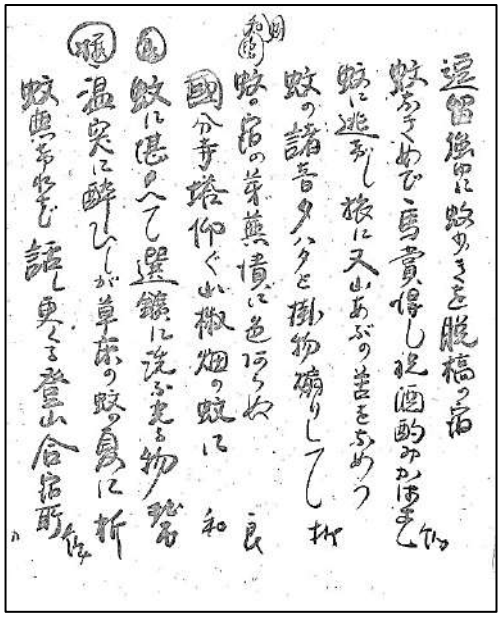
（原本資料・福田鐐造氏蔵資料より）



壬子九月
碧師来高記念
於　月波僂上
蚊　作者選者共九名
二十八句

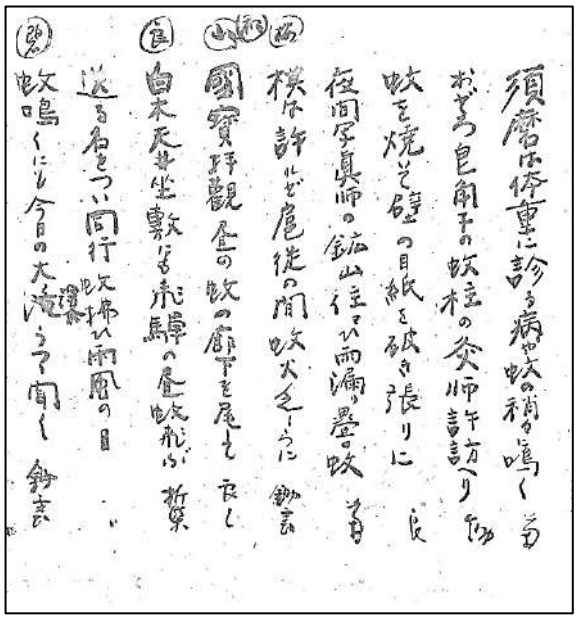
一

投句



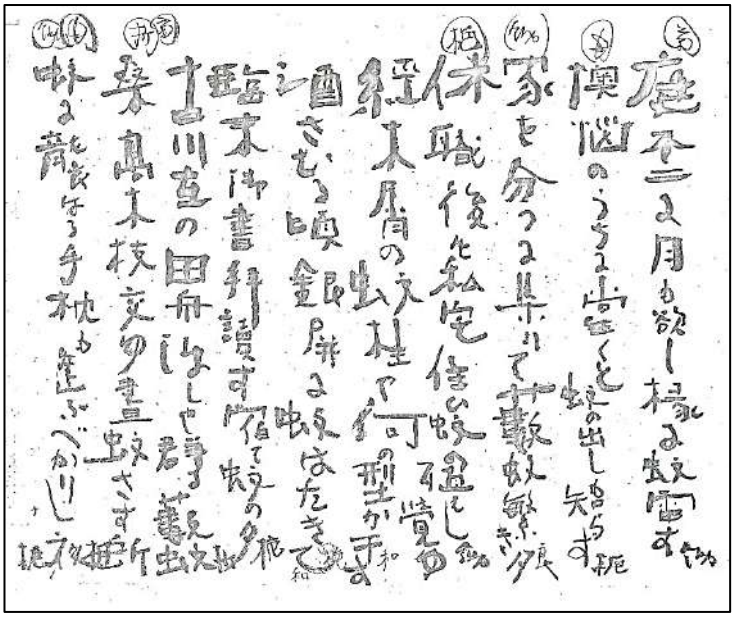
逗留強ゆに蚊少きを脱稿の宿　鋤雲
蚊なきめでゝ馬賞得し祝酒酌みかはす　同
蚊に逃げし旅に又山あぶの苦をなめつ　同
蚊の諸音夕ハタと掛物煽りして　折柴
蚊の宿の葉蕪漬に色あらぬ　良々
国分寺塔仰ぐ山椒畑の蚊に　和露
蚊に堪へて選鉱に洗ふ光る物　碧梧桐
温突に酔ひしが草床の蚊の夏に　折柴
蚊無ければ話し更くる登山合宿所　鋤雲

二



須磨は体重に診る病や蚊の稍々に鳴く　菊字
おどろ皂角子の蚊柱の灸師許訪へり　鋤雲
※皂角子（さいかち）：マメ科の高木
蚊を焼いて壁の目紙を破き張りに　良々
夜間写真師の鉱山住ひ雨漏り畳の蚊　菊字
棋は許れど扈従の間蚊火乏しらに　鋤雲
※扈従（こしょう）：貴人にしたがう
国宝拝観昼の蚊の廊下を尾して　良々
白木天井座敷にも飛騨の昼蚊飛ぶ　折柴
送る名をつい同行蚊払ひ雨風の日　同
蚊鳴くにも今日の大瀑うつゝ聞く　鋤雲

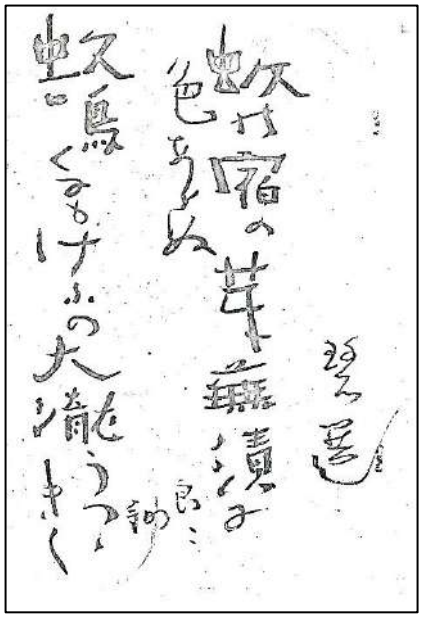
三



庭不二に月も欲し椽に蚊雷す　鋤雲
懊悩のうちに尚生くと蚊の出しも知らず　山梔子
家を分つに集りて薮蚊繁き夕　良々
休職後を私宅住ひ蚊の殖えし覚ゆ　鋤雲
経木屑の蚊柱や何の型か干す　和露
酒さむる頃銀屏に蚊はたきて　同
臨末御書拝読す宿は蚊の夕　山梔子
古川在の田舟渡しや群る薮蚊　折柴
桑高木枝交ゆ昼蚊さす所　山梔子
蚊に襲はる手枕も逢ふべかりし夜　同

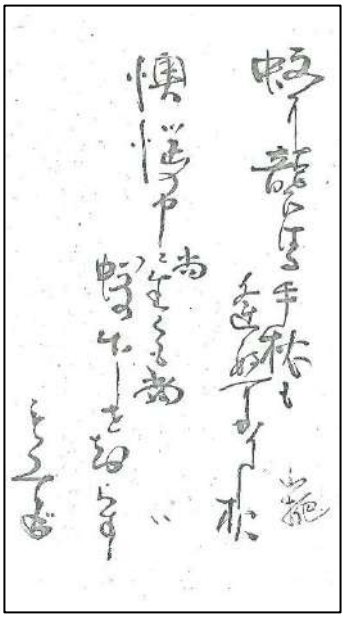
選句

碧選



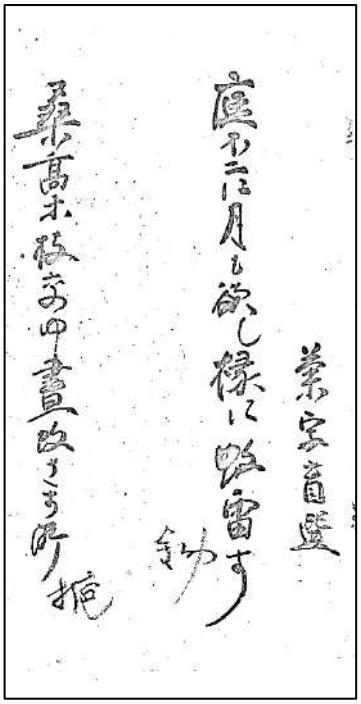
蚊は宿の芽蕪漬に色あらぬ　良々
蚊鳴くにもけふの大滝うつゝきく　鋤雲

もじぢ選



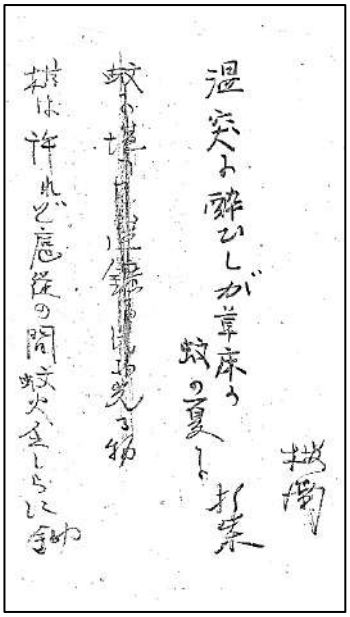
蚊に襲はる手枕も逢ふ可かりし夜　山梔子
懊悩のうちに尚生くも蚊の出しを知らず　同

菊字妄選



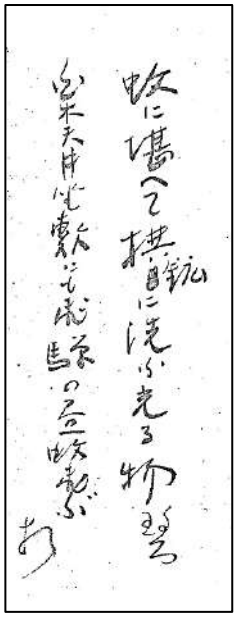
庭不二に月も欲し椽に蚊雷す　鋤雲
桑高木枝交ゆ昼蚊さす所　山梔子

桜南選



温突に酔ひしが草床の蚊の夏に　折柴
棋は許れず扈従の間蚊火乏しらに　鋤雲

良々選



蚊に堪へて選鉱に洗ふ光る物　碧梧桐

折柴選

白木天井座敷にも飛騨の昼蚊飛ぶ　折柴

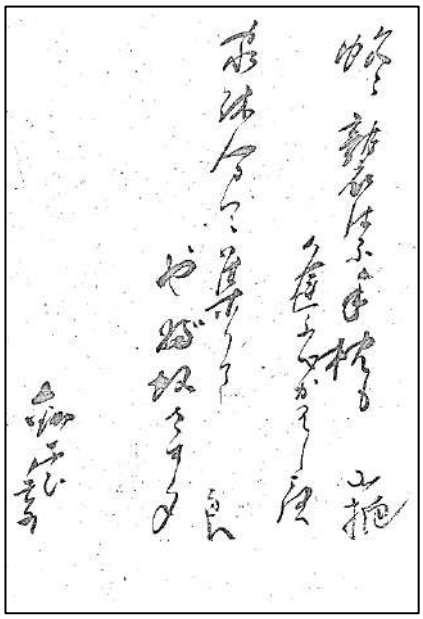
桑高木枝交ゆ昼蚊さす所　山梔子

蚊の宿の葉蕪漬に色あらぬ　良々

鋤雲選

蚊に襲はる手枕も逢ふべかりし夜　山梔子

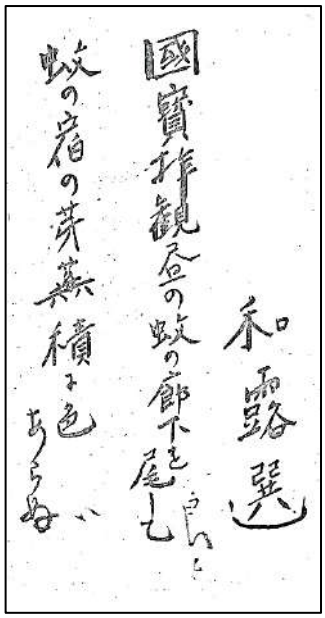
家を分つに集りてやぶ蚊さす夕　良々



和露選

国宝拝観昼の蚊の廊下を尾して　良々

蚊の宿の葉蕪漬に色あらぬ　同

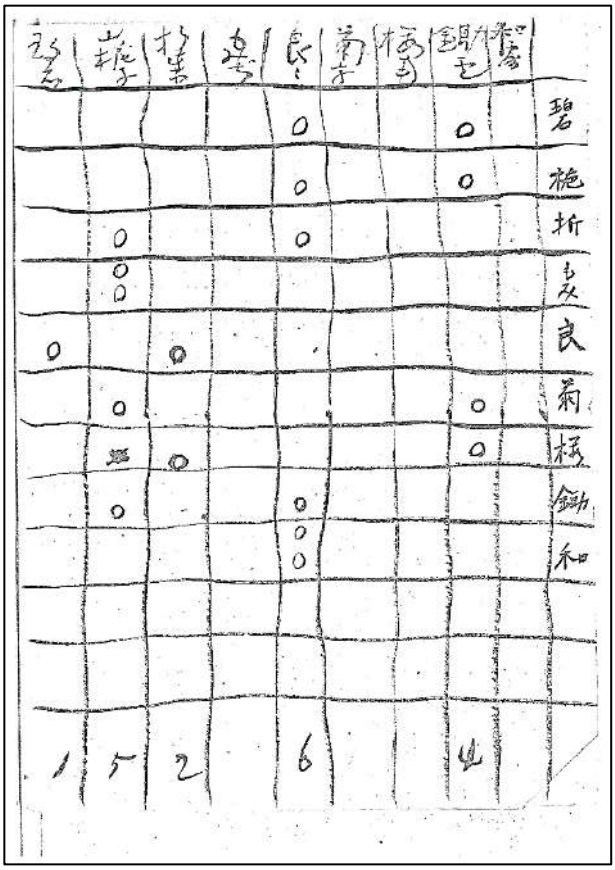


山梔子選

国宝拝観昼の蚊の廊下を尾して　良々

休職後の私宅住ひ蚊の殖えし覚ゆ　鋤雲

碧	山梔子	折柴	もみぢ	良々	菊字	桜南	鋤雲	和露	
				○			○		碧
				○			○		梔
	○			○					折
	○○								も
○		○							良
	○						○		菊
		○					○		桜
	○			○					鋤
				○○					和
1	5	2		6			4		



得票

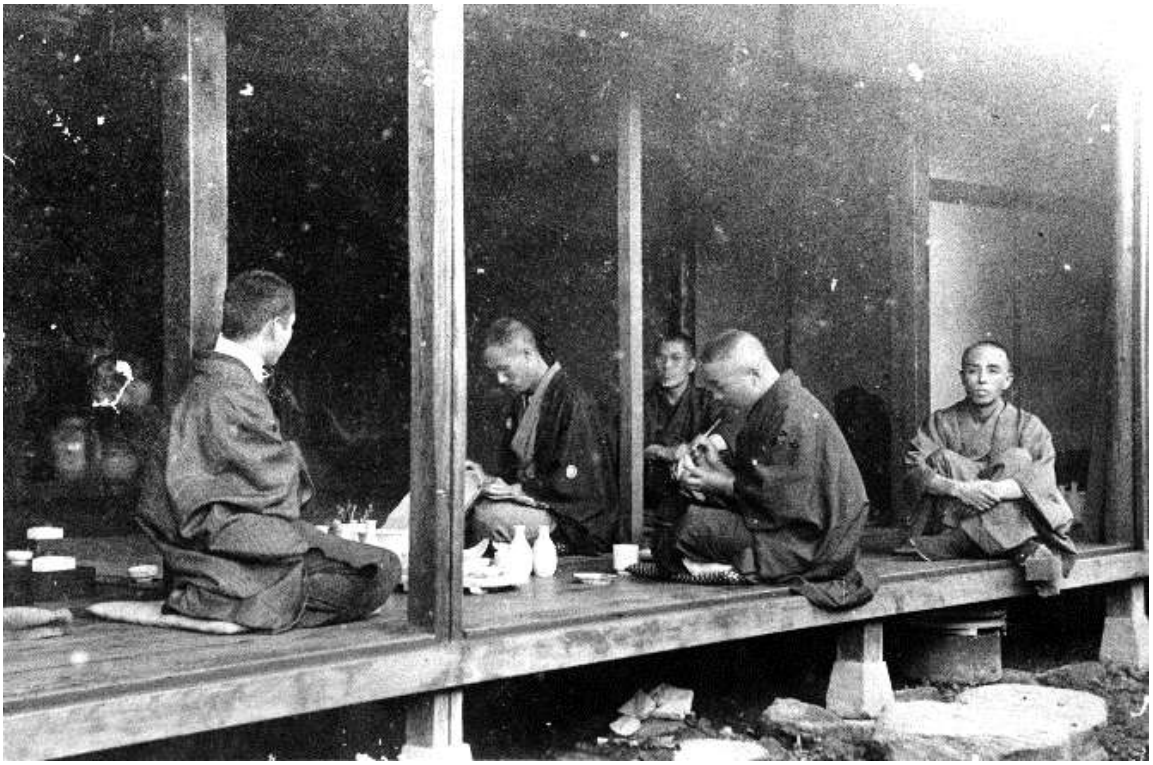
二、写真

・岩下栄女(月波楼女将)

・住伊書店

・俳人仲間記念写真

・国分寺の銀杏前記念写真



・松泰寺句会の様子

・松泰寺前記念写真

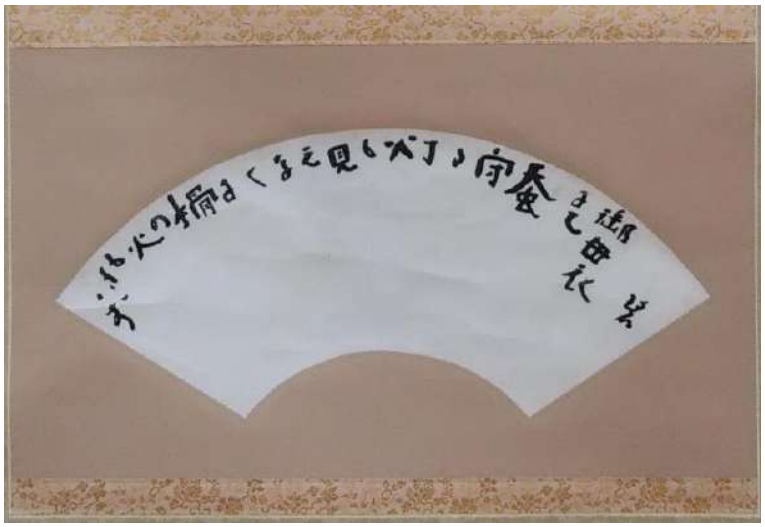
三、明治時代後期の俳人手蹟など

第一章　河東碧梧桐

小幅　麦稈嵩に締め合せある障子

軸（扇面）　大家族の遺す家ウリの木の茂り

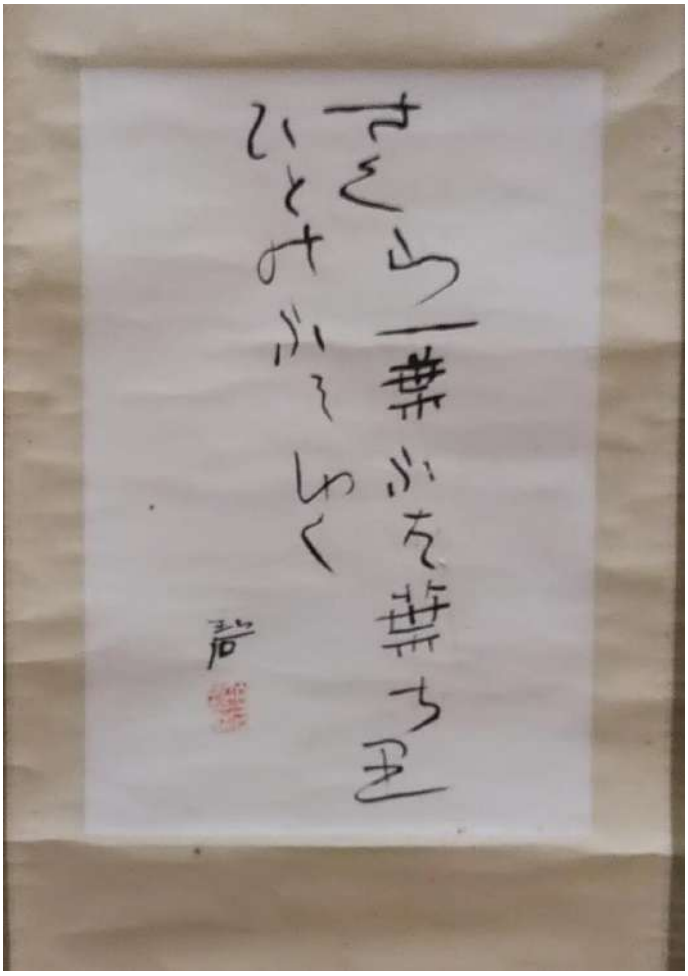
軸（扇面）　御母衣にて蚕守る灯も見えなくに榾の火もささず



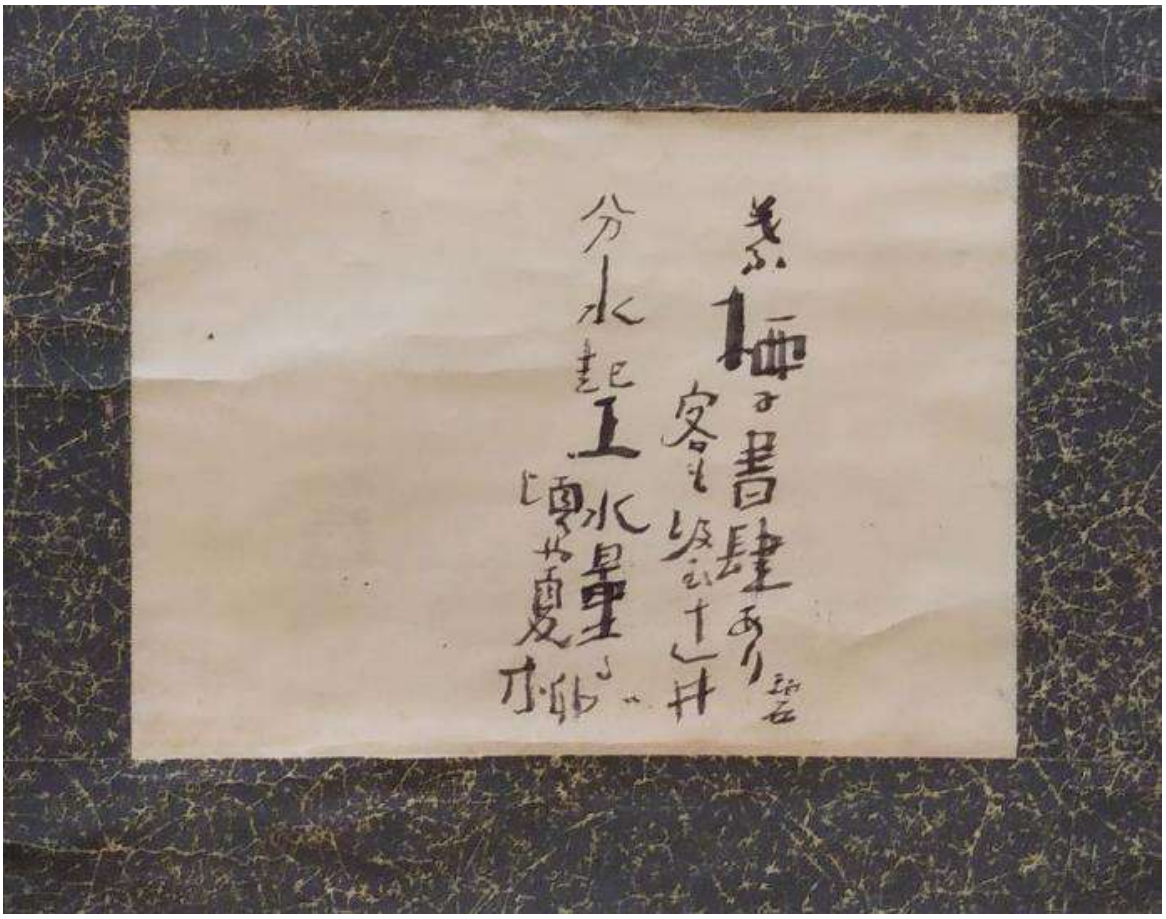
掛軸　第一楼の桜だらけの中かい島便りする

軸（短冊）　茶箪笥の水仙けふ水さしぬ

掛軸　さくら一葉ふた葉ち里ひと能ふ天わく

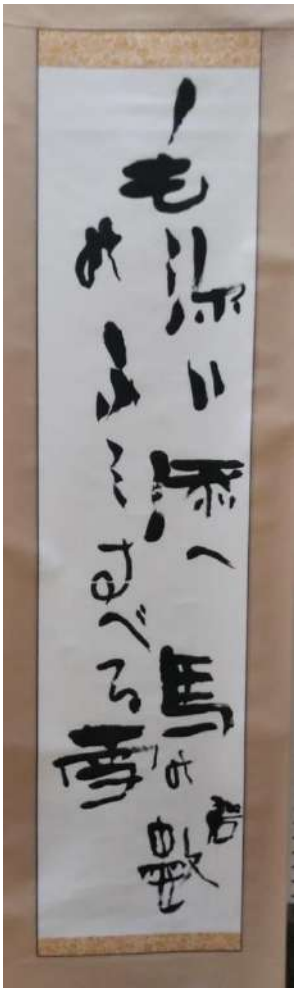


掛軸　夏柳二句　分水起工水量る頃や夏柳　葉柳に書肆ありて客も掬む辻井



掛軸

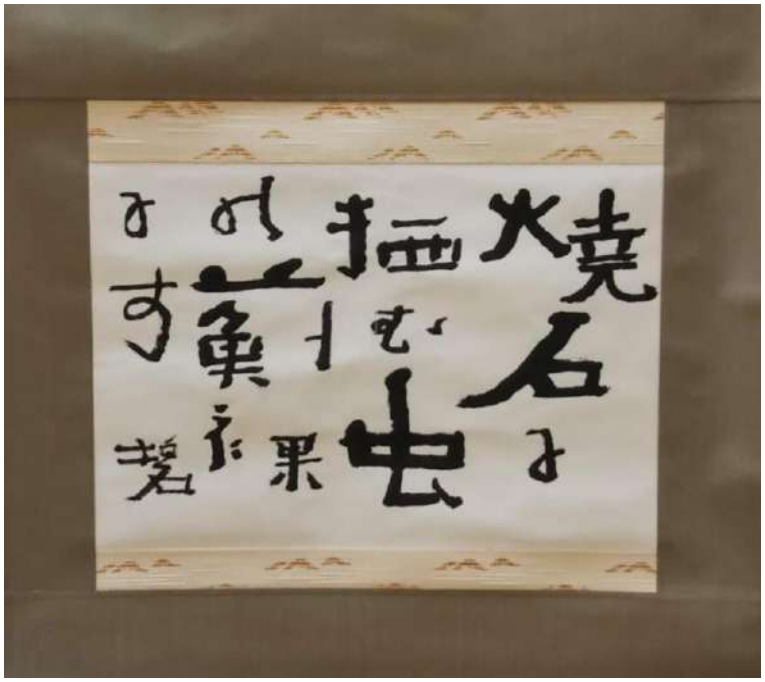
毛深い添へ馬の数がふみすべる雪



掛軸

焼石に栖む虫の薊裸にす

明治四十二年七月



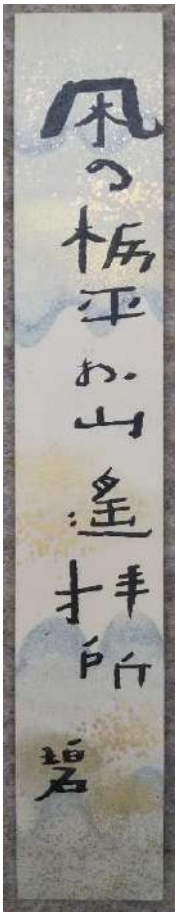
扇面

蚊帳を取れ枕に近き水音に

掛軸

挙児賀　雪解山々の輝けばこの家の第一子

短冊　凩の栃平の山遥拝所

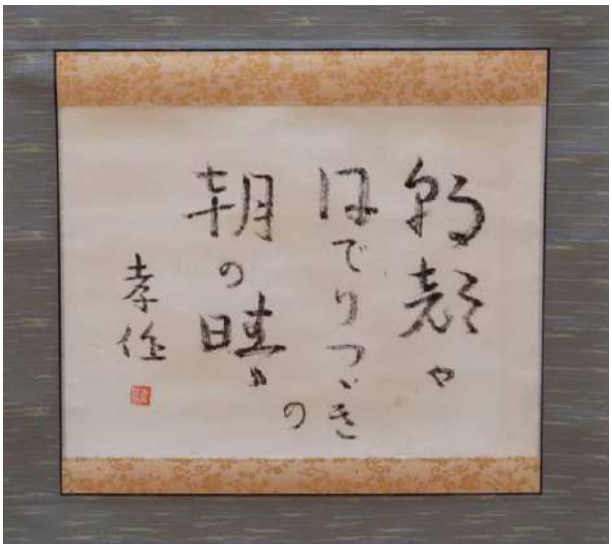


短冊　磧の人の行く方へゆく春の水嵩

短冊　柚落とす竿にて尖れ里

第二章　瀧井孝作

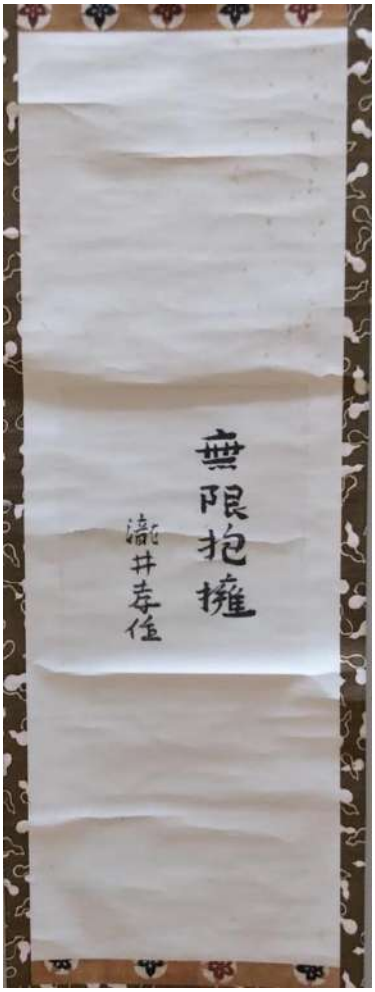
掛軸　朝顔や日でりつづきの朝の晴

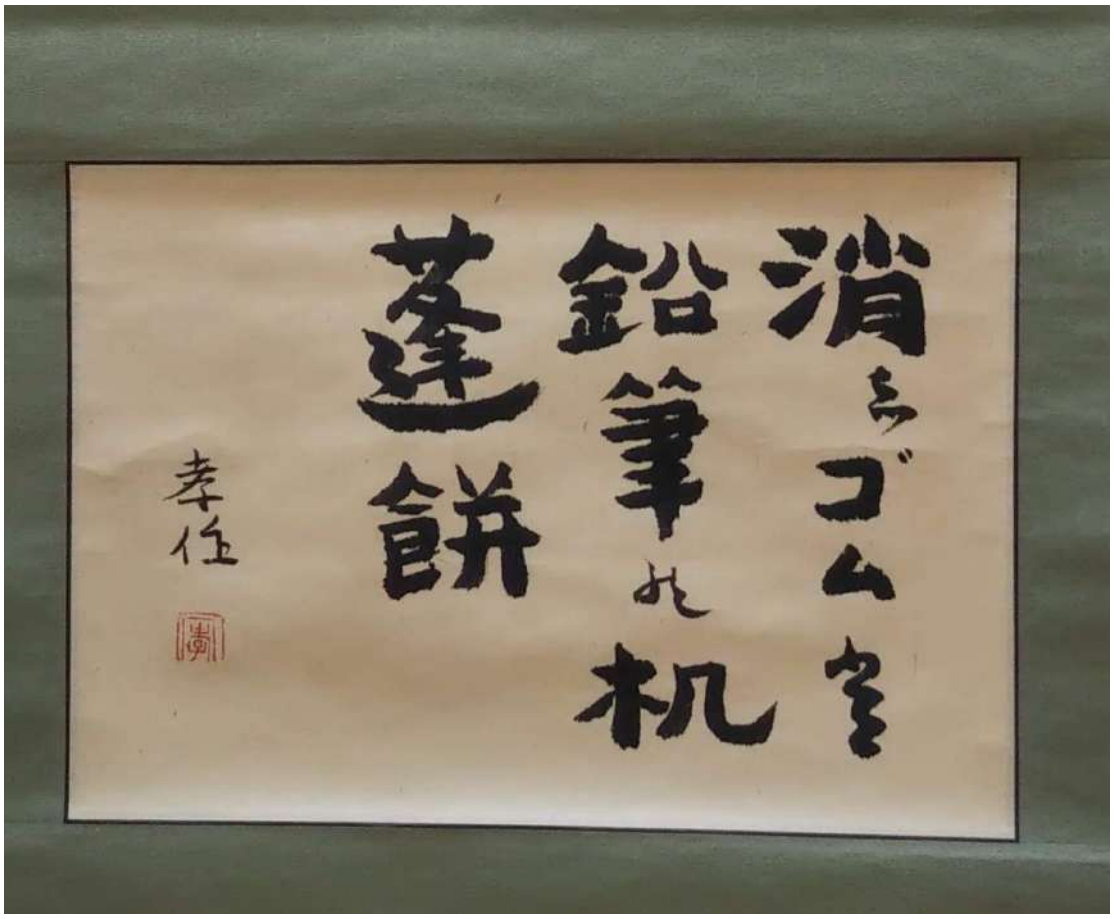


掛軸　無限抱擁

掛軸

乗鞍に雪光る日や蕪引

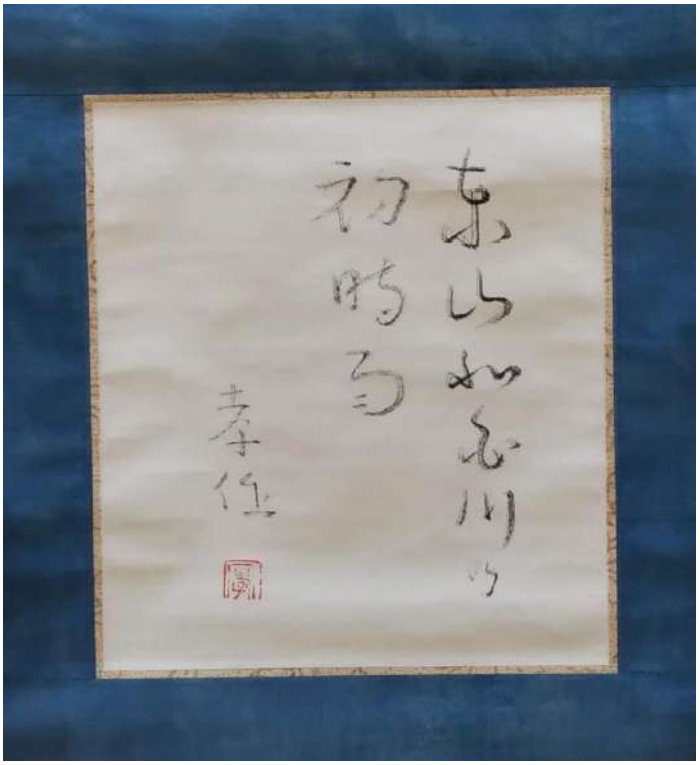




掛軸

消しゴムと鉛筆の机蓬餅

掛軸　東山北白川の初時雨



掛軸　菜畑へ子供のはいる裏庇

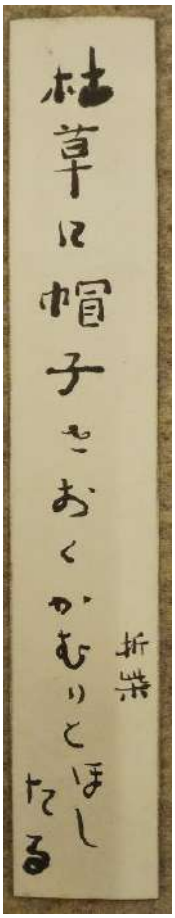
短冊　下谷浅草ボーと笛鳴り冬の夜　大正五年

短冊　牡蠣船から煤まるけの夕日が赤い　大正六年

短冊　我家に来るもの樅の葉あびたり

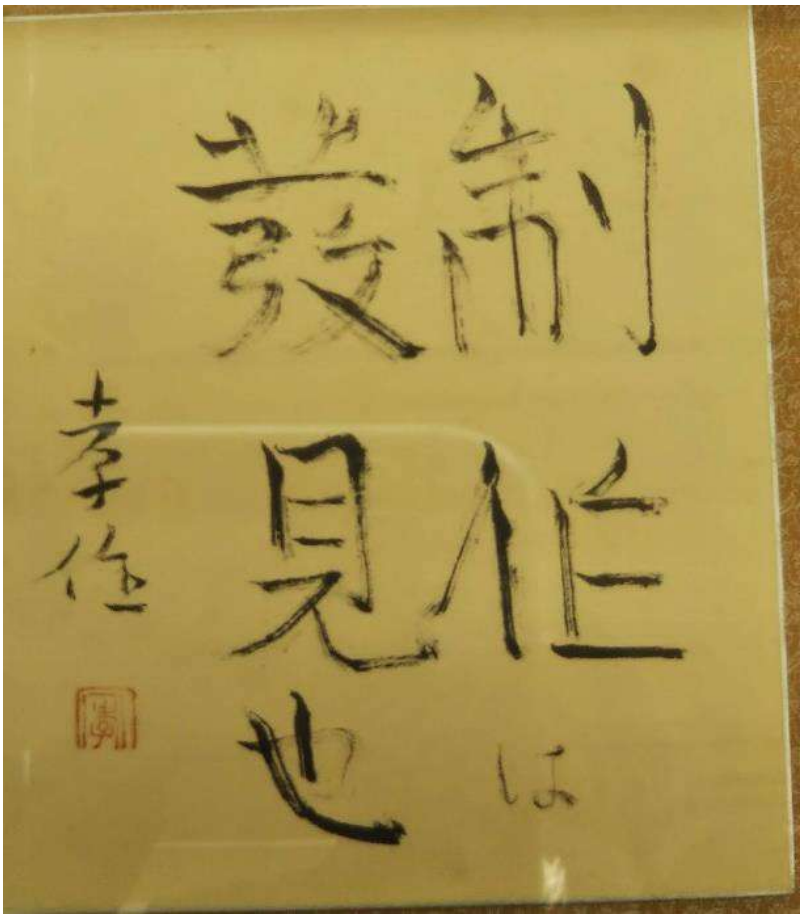
短冊　電燈つけた障子の中に畳に寝そべる

短冊　枯草に帽子をおくかむりとほしたる　大正七年



短冊　蜜柑の荷土間の高窓の二つ　大正五年

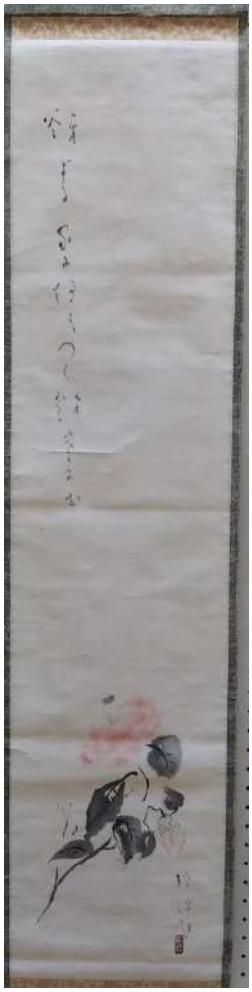
春慶丸盆　花ぐもり笹原くだる山魚つり



色紙　製作は発見なり

第三章　岩谷山梔子

掛軸　谺する家に住みつく餘寒かな

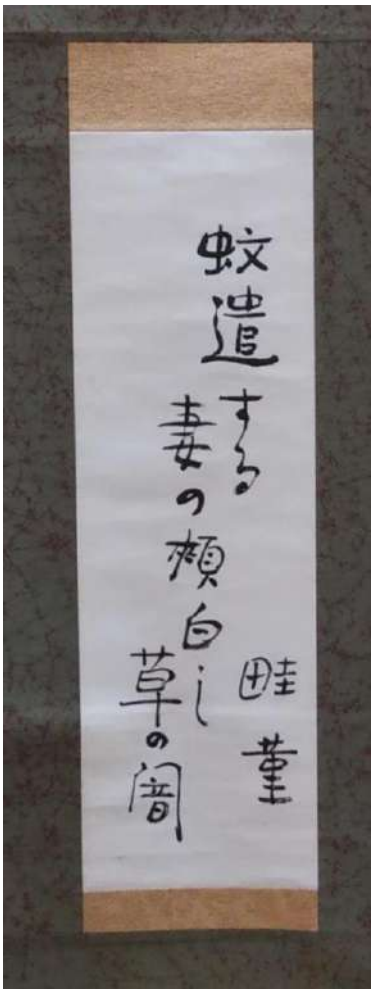


短冊　学に気狂ひし遠祖ありわれに返り咲く

短冊　自笑隻聲ニ魂をのゝくや安居僧

第四章　柚原畦菫

掛軸　蚊遣りする妻の頬白し草の闇

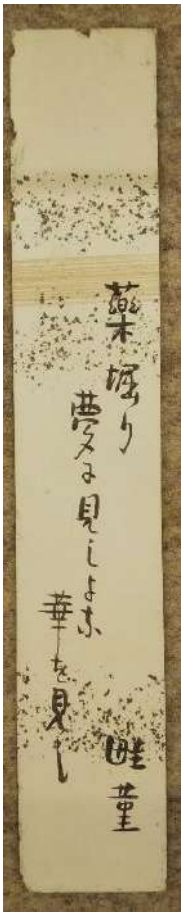


短冊　吊　瞑想の眼開くや散る紅葉

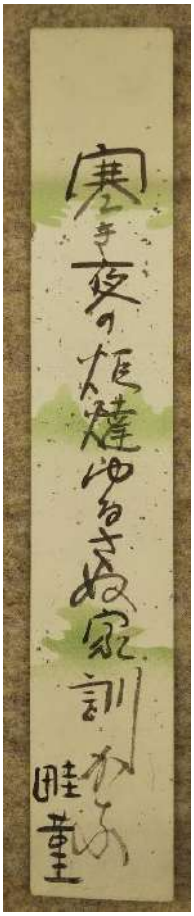
短冊　吊　帰り咲く花にまた湧く思ひかな

短冊　折柴兄ニ　遇ふ冬は栴檀の實を味はん

短冊　薬堀り夢ニ見しよな華を見し

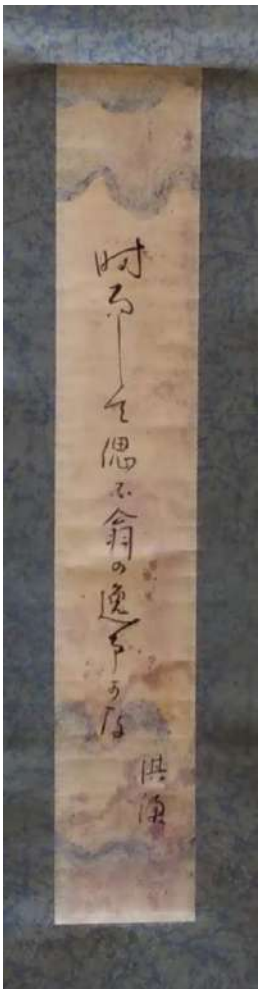


短冊　寒き夜の炬燵ゆるさぬ家訓かな

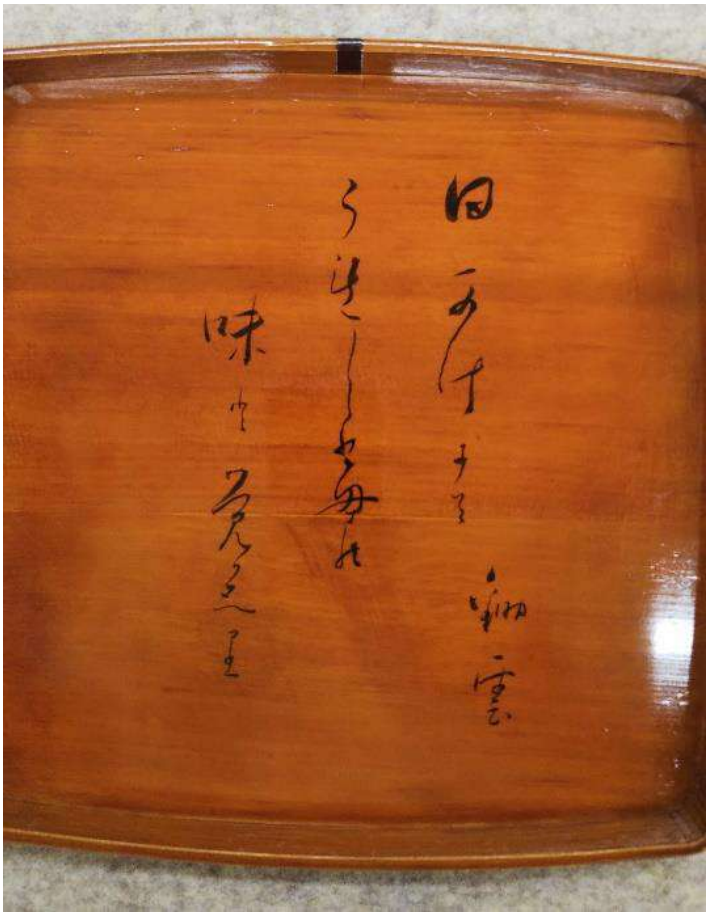


第五章　柚原淇澳

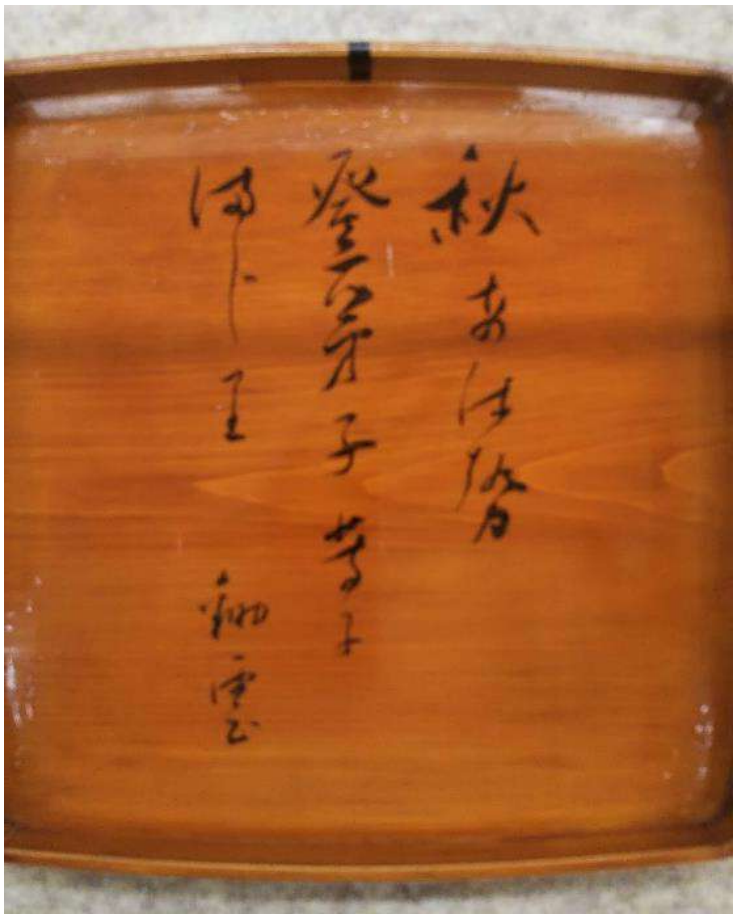
掛軸　時雨して偲ぶ翁の逸事かな



第六章　福田鋤雲

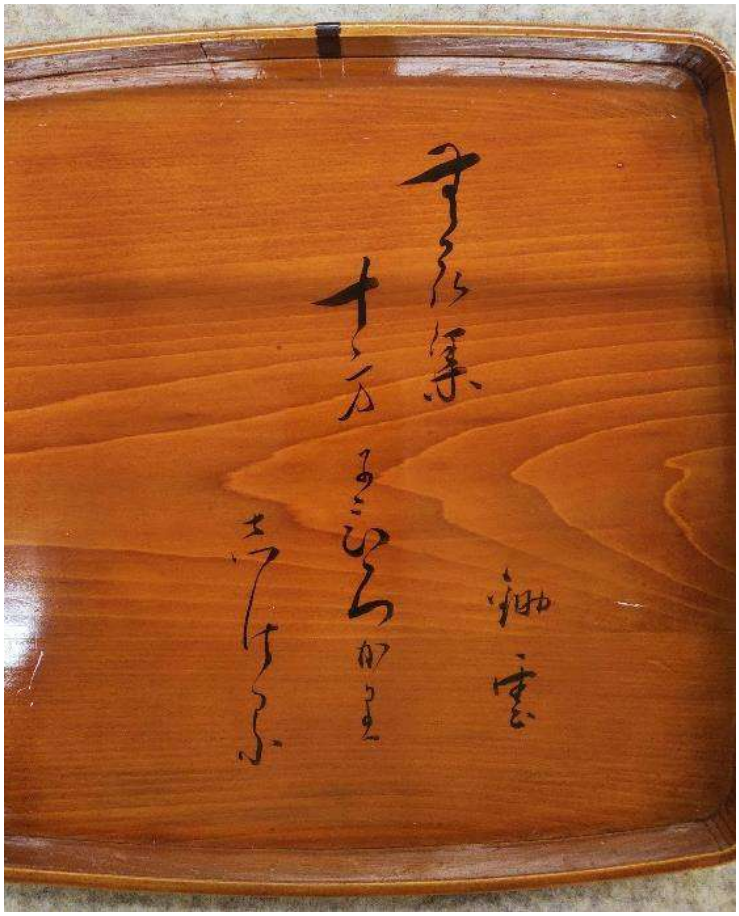


春慶盆　日かけにてうれしき母の味と覚えり



春慶盆　秋あは勢登弟子等子満じ里

春慶盆　無花集十方ニ飛ろか里志けるふ



短冊　丈夫さのみえてかほるや松乃花

第七章　小鳥良々

短冊　人の顔に似た秋の犬につかれたり

短冊　冬の岩ニ女全身の息つかい

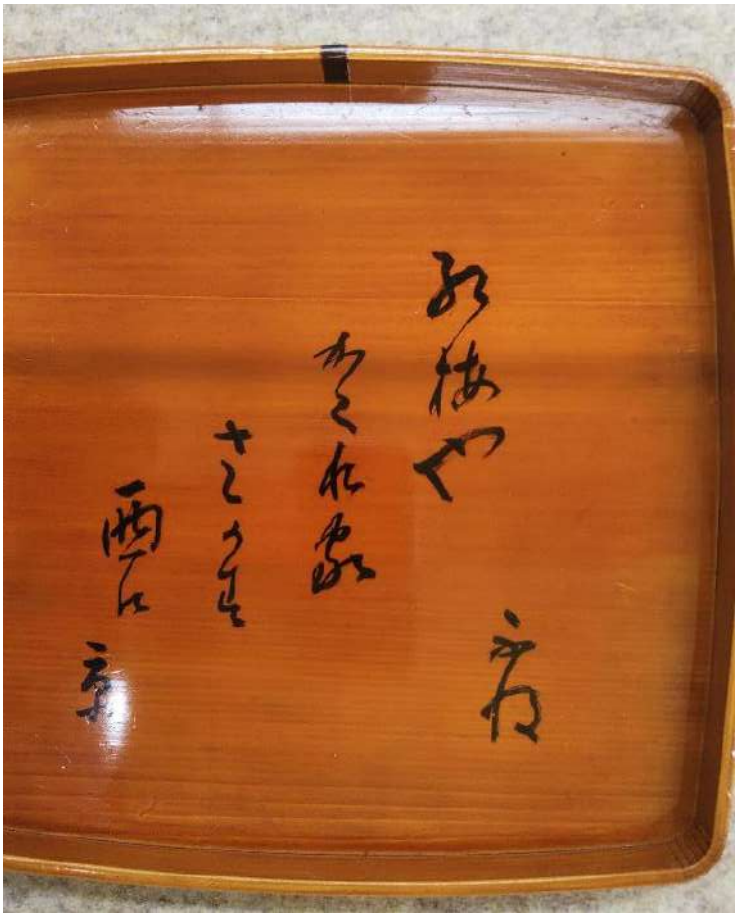
短冊　祭髪のそゝくれの艶に免かし

第八章　勇　桂雪

短冊　山吹や寝覚めの嗽日のたけて

第九章　永田不及

春慶盆　紅梅やかくれ家さかす西の京

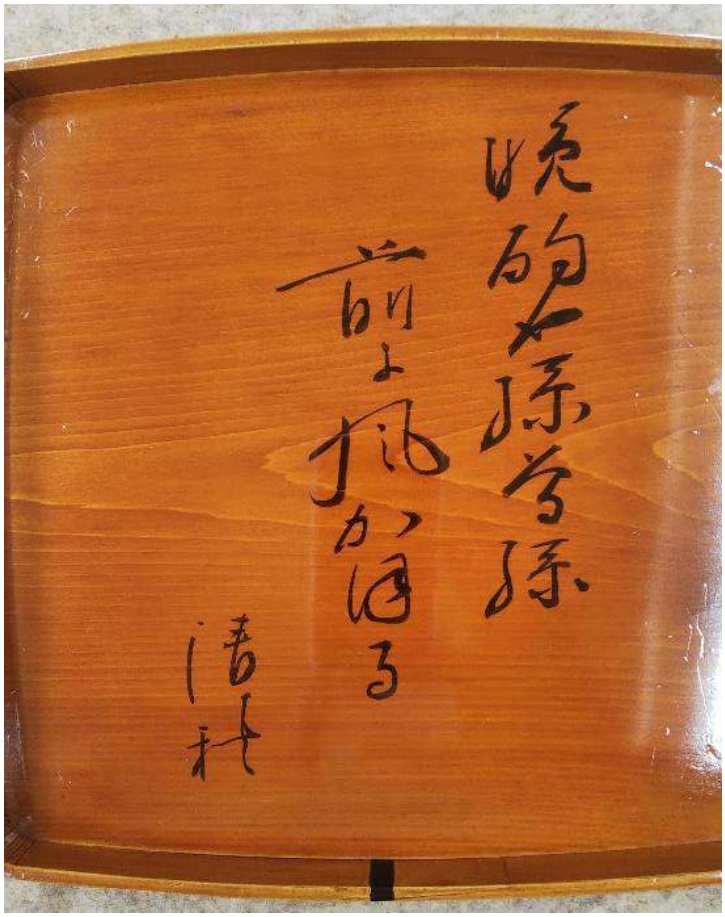


第十章　西本小夢

春慶盆　鶯や道はかどらぬ小半日

春慶盆　白川の関は跡なし秋の風

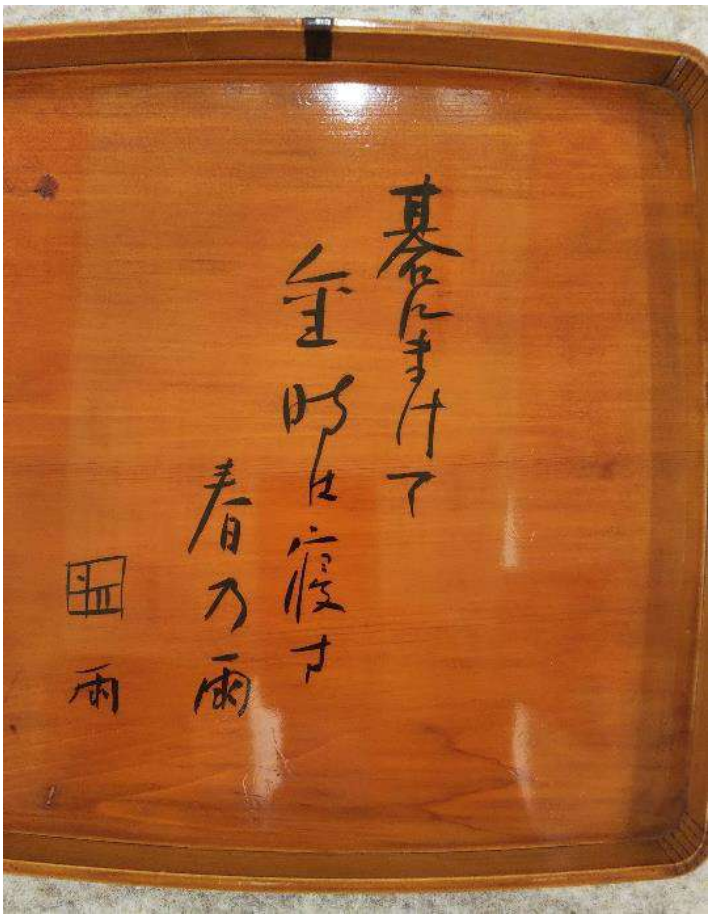
春慶盆　わき足らぬとこに味あり一夜漬



春慶盆　晩酌や孫曾孫前ニ風かほる

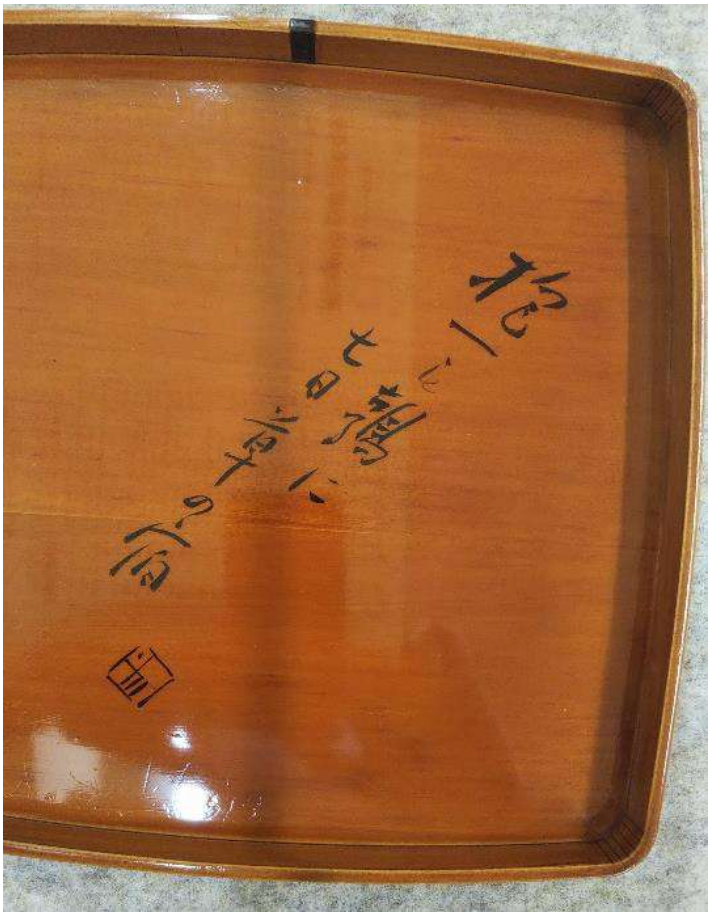
第十一章　伊東清秋

春慶盆　如是我聞

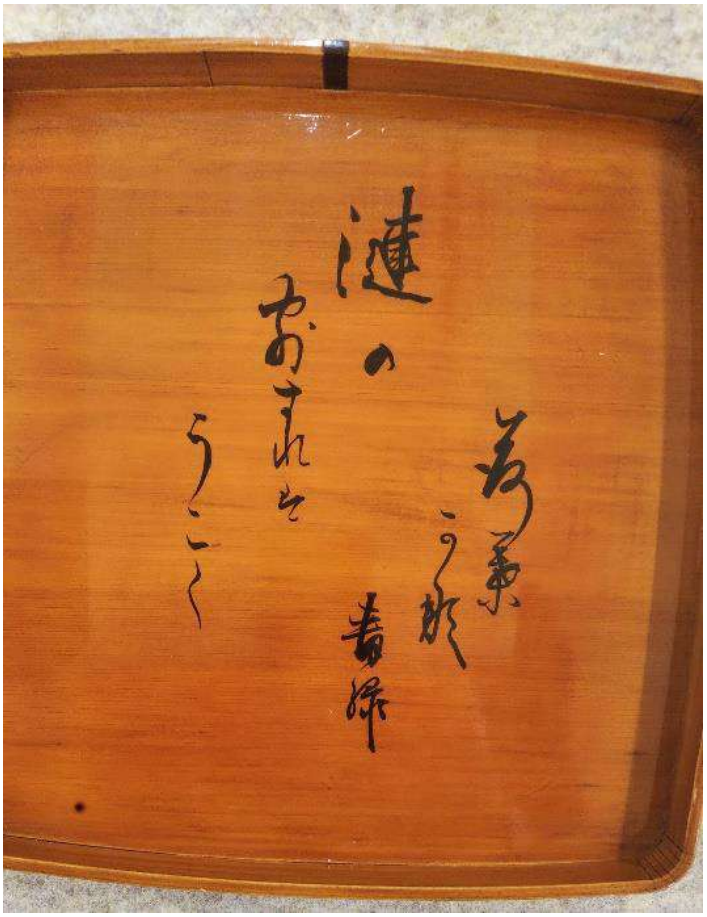


春慶盆　碁にまけて金時に寝さ春の雨

第十二章　上木象雨

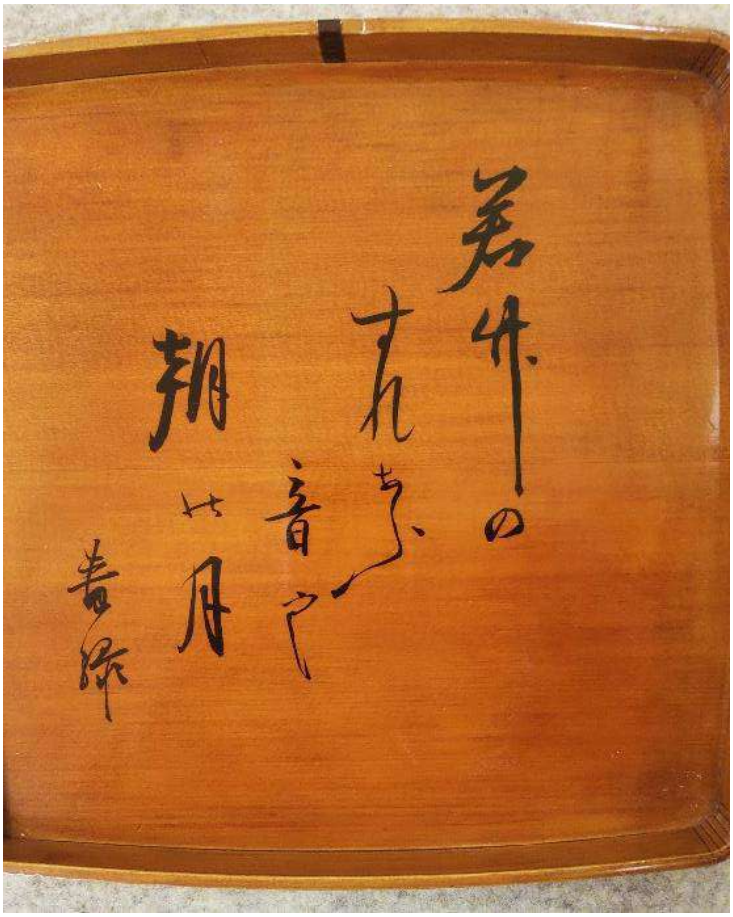


春慶盆　抱一も鶉に七日草の宿

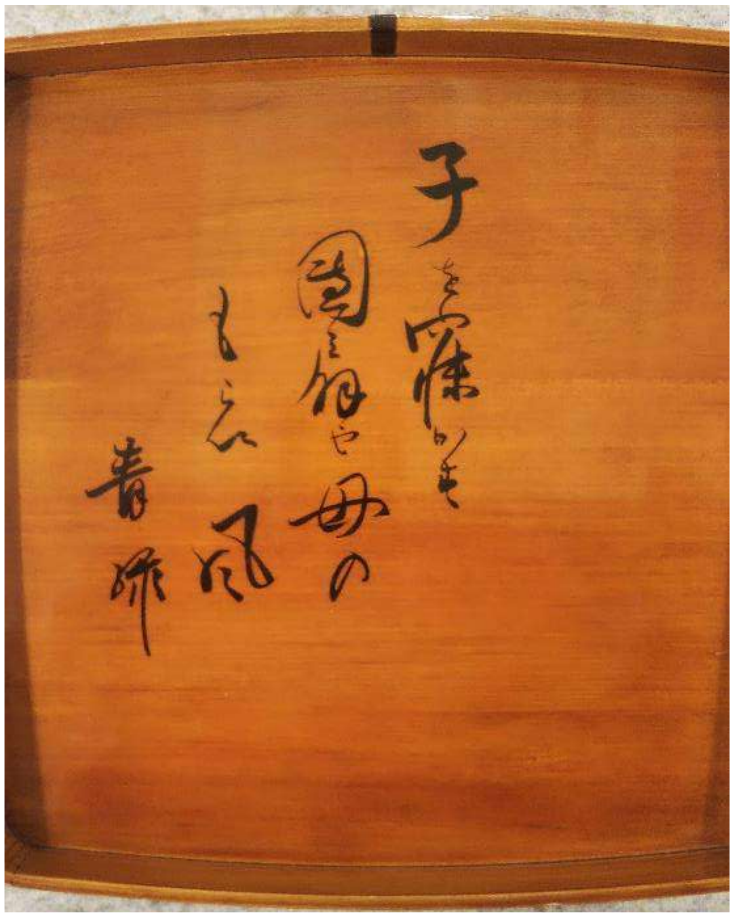


春慶盆　漣の寄すればうごく落葉可那

第十三章　柿下青緑

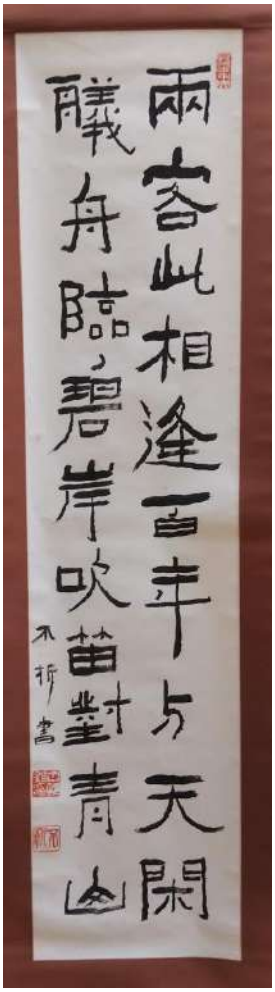


春慶盆　若竹のすれあふ音之朔能月



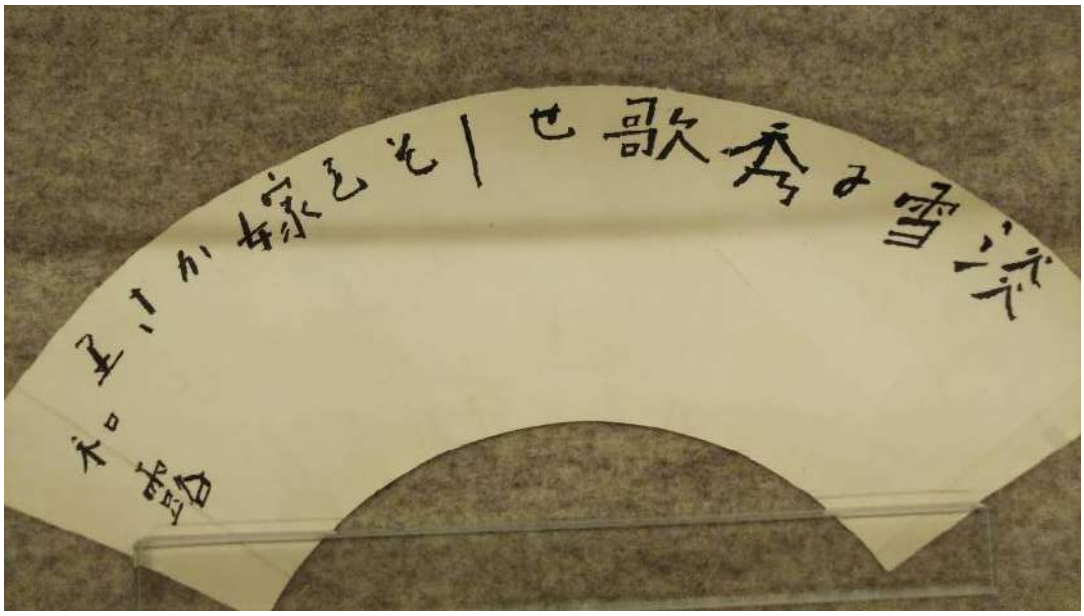
春慶盆　子を寝かす団扇や母のもら似風

第十四章　中村不折



掛軸　両客此相違百年・・碧岸吹笛対青

第十五章　川西和露



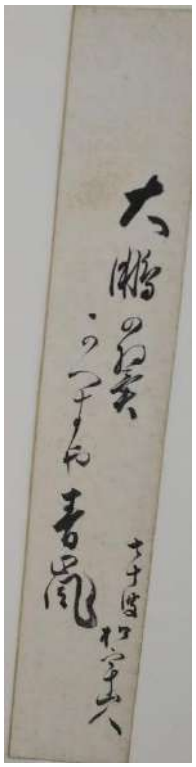
扇面　淡雪に秀歌せしとて嫁かさ里

四、その他

第一章　明治大正俳人筆跡屏風

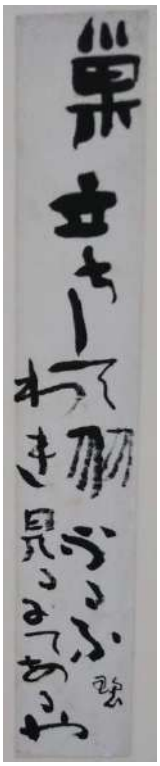
内藤鳴雪　迎へしは古来稀なるまでぢやげな　鳴　雪

巖谷小波　河豚食うて心も太くなりにけり　小　波



伊藤松宇　大鵬の翼かへすや青嵐　七十叟松宇山人

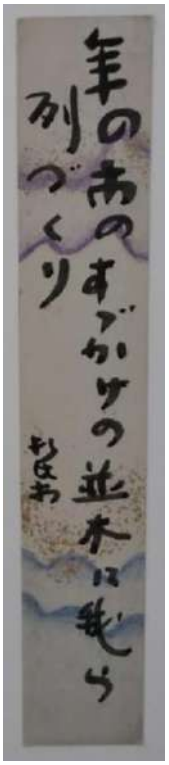
高浜虚子　千両取る手許の水の小揺哉　虚　子



河東碧梧桐　巣立ちして羽ふるふわき見てあるや　碧

荻原井泉水　掉さして月のたゝ中　井　泉

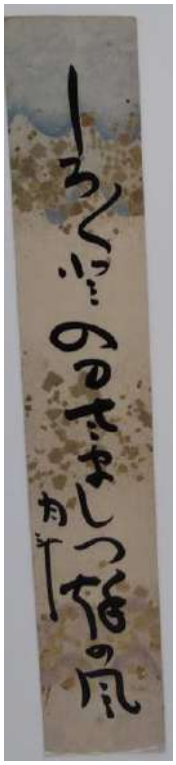
滝井折柴　年の市のすずかけの並木に我ら列つくり　折柴



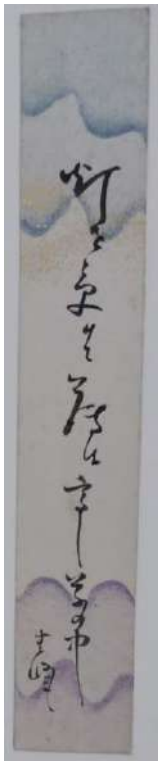
喜谷六花　銀杏や會上八萬四千の顱　六花

前田普羅　大凍に衆山径を交はしけり　普羅

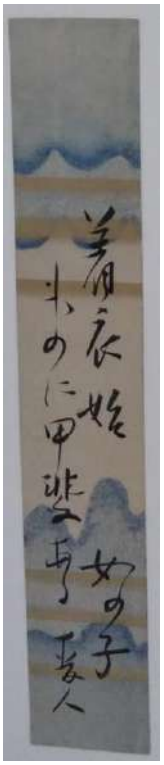
青木月斗　しろくと入日さましつ秋の風　月斗



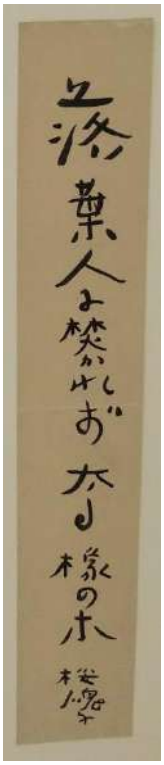
嶋田青峰　灯を享けて薄は高し草の中　青峰



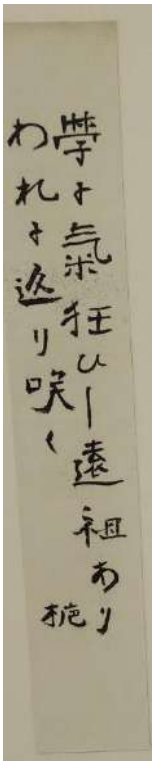
星野麦人　着衣始ものに甲斐ある女の子　麦人



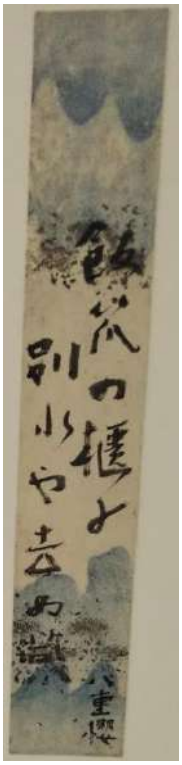
安斉桜磈子　落葉人に焚かれず太る橡の木　桜磈子



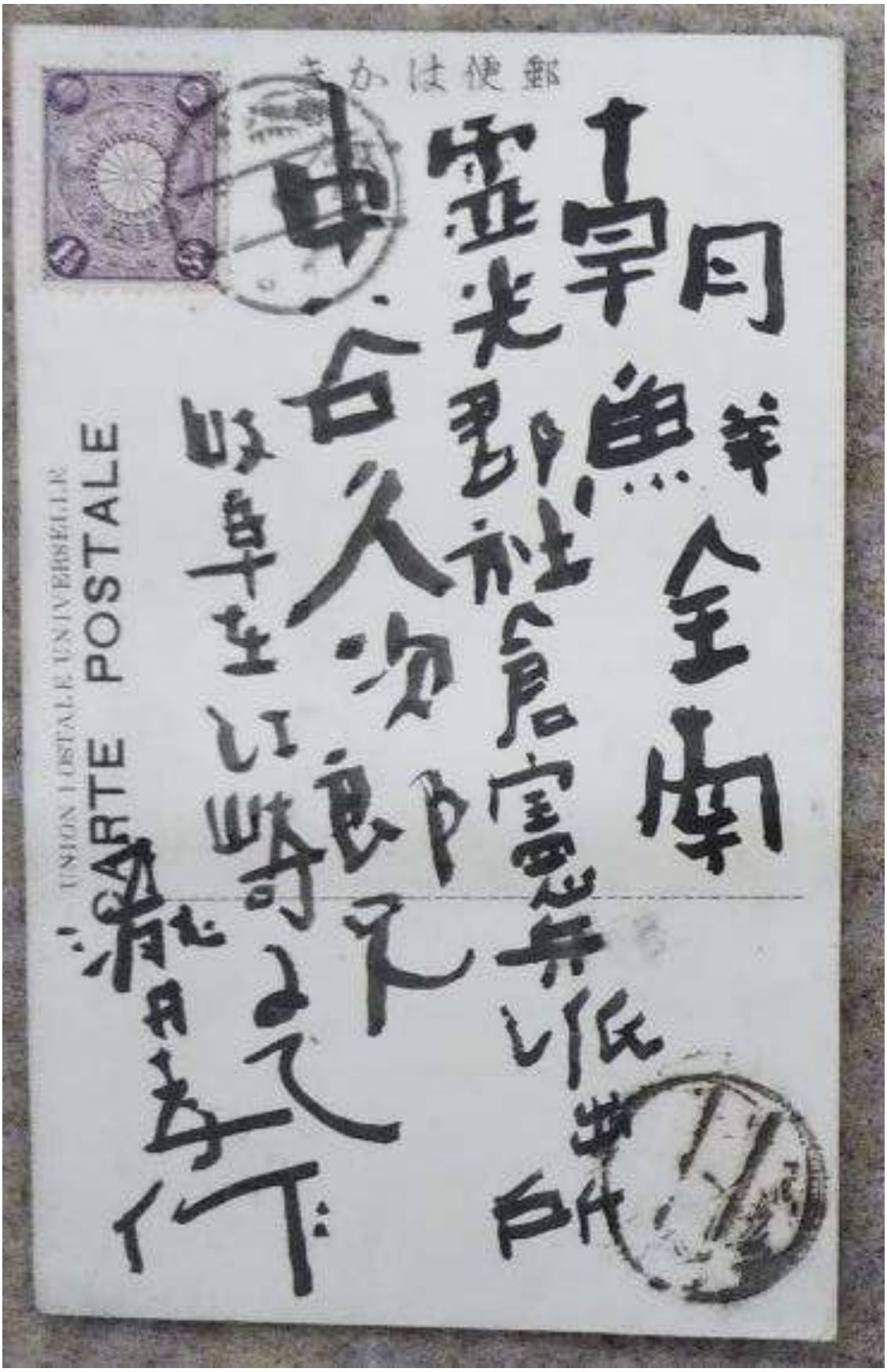
岩谷山梔子　学に氣狂ひし遠祖ありわれに返り咲く　梔

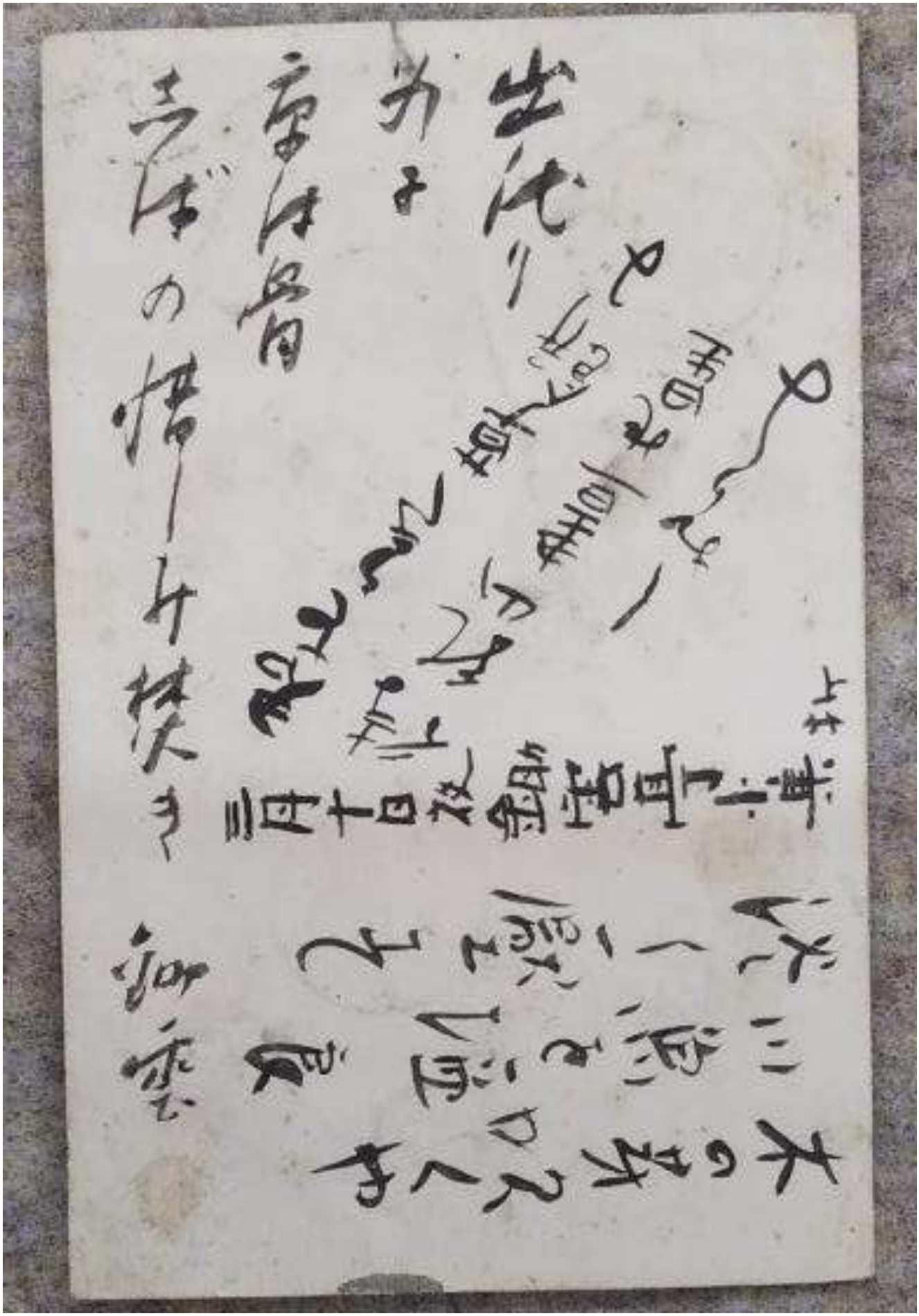


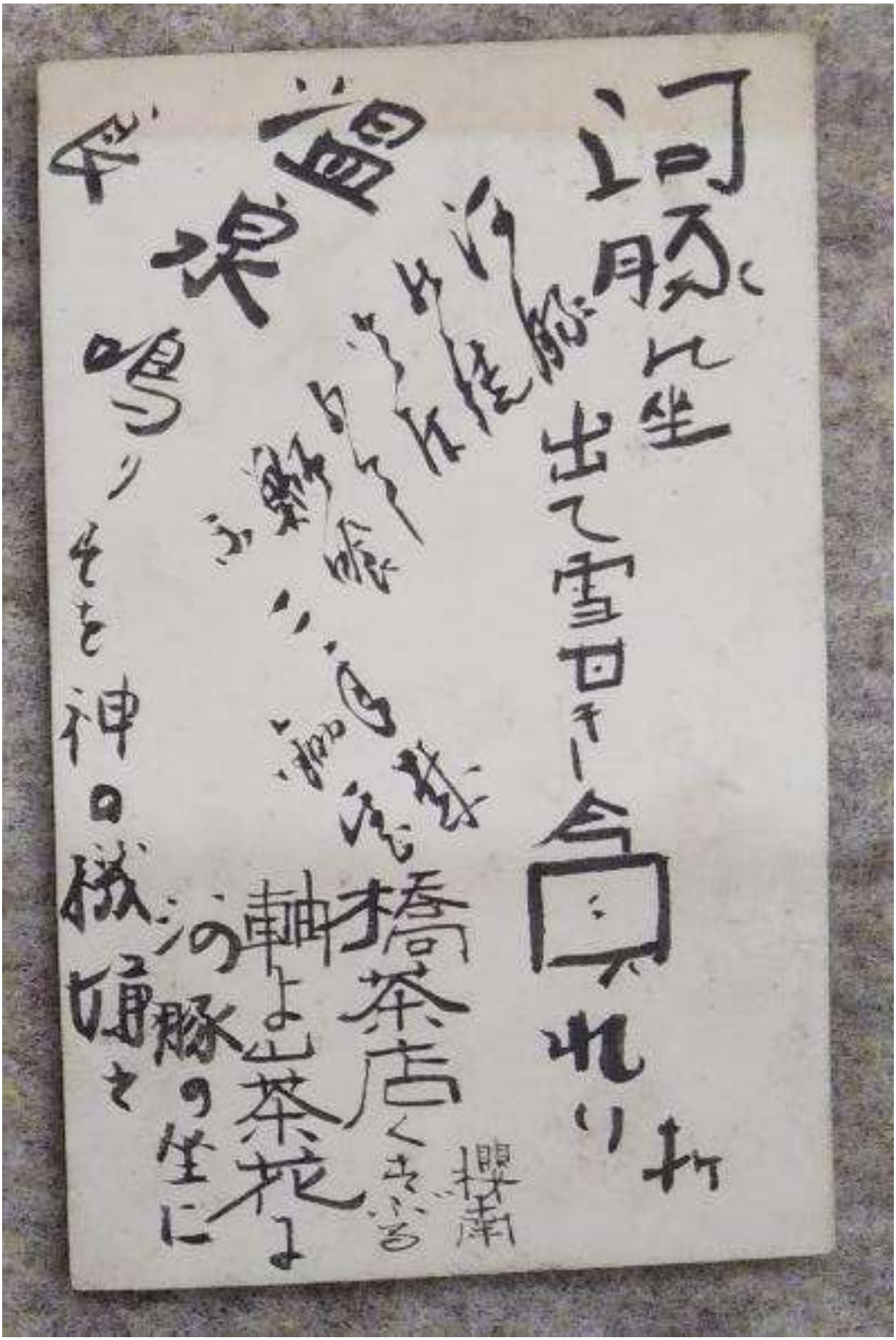
不明　飯笊の櫃と別れや去ぬ燕　八重桜

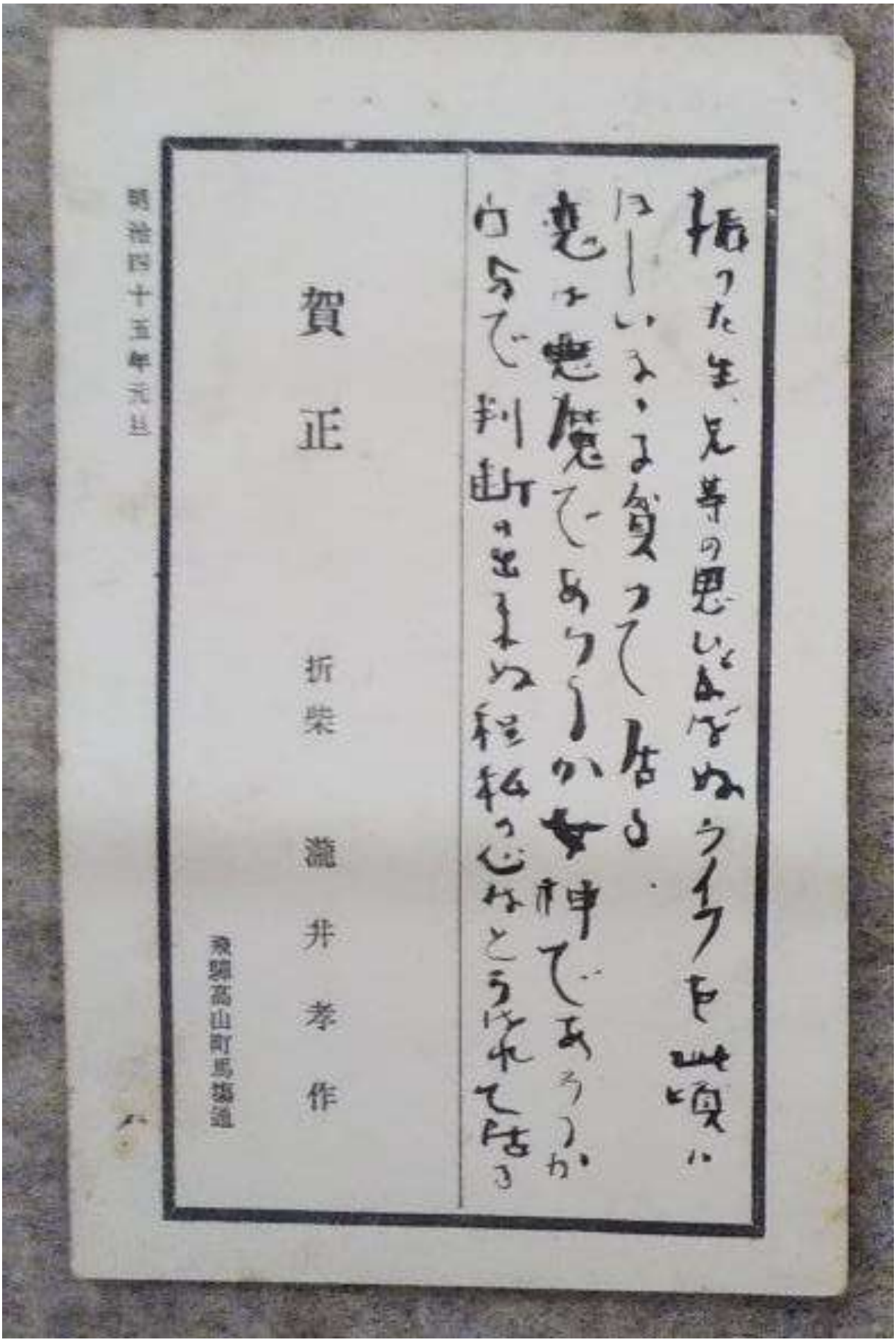


伊藤観魚　桁を搗かるる半日母のお一人　観


郵便はがき
CARTE POSTALE
UNION POSTALE UNIVERSELLE




櫻南
橋茶店
軸よ茶花よ
の豚の生に
そを神の



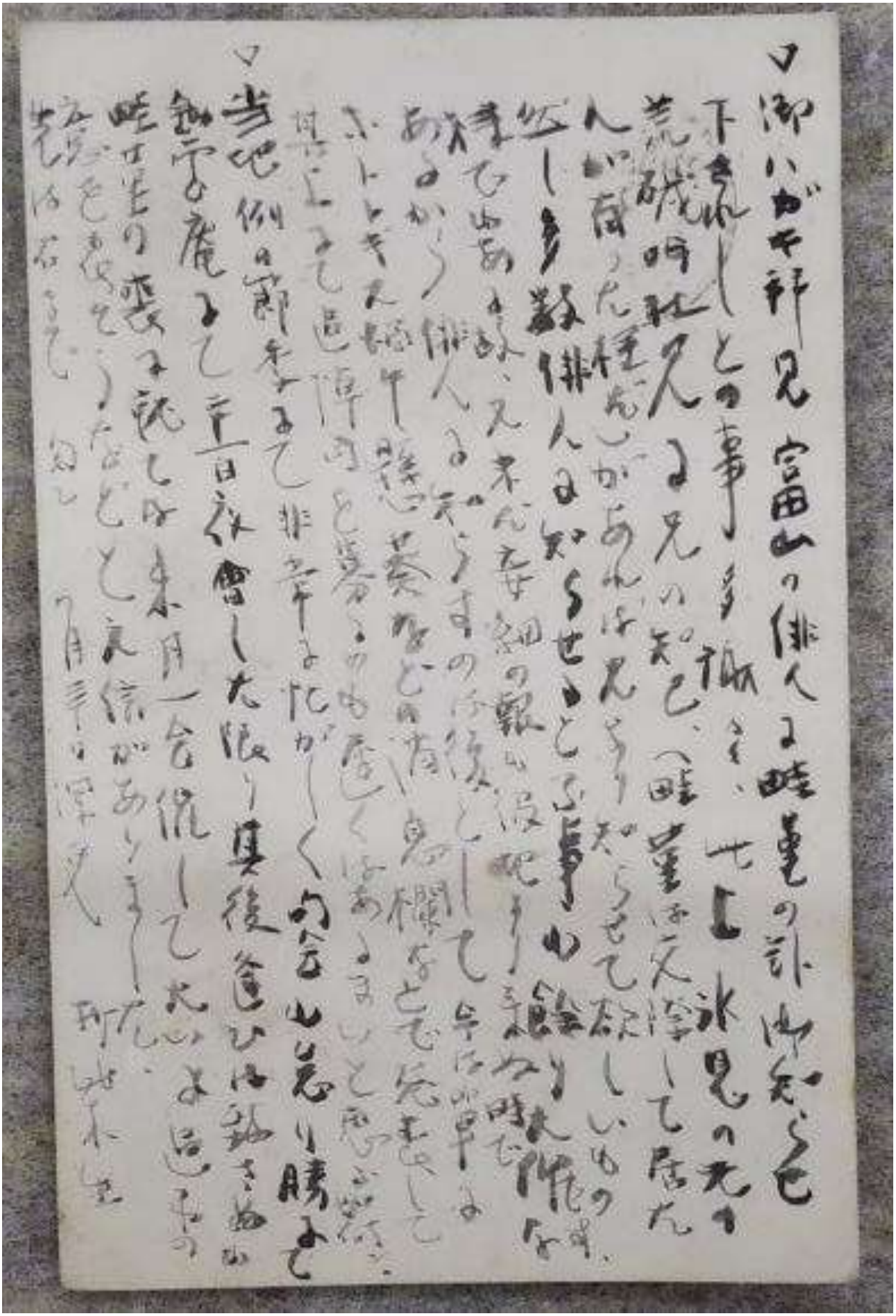
振つた生、兄等の思ひなぐなぬ
ライフを此頃ハ
ハしいよいよ賀つて居る
悪は悪魔であらうか神であらうか
自分で判断はまゐ程私の心みとうけれて居る

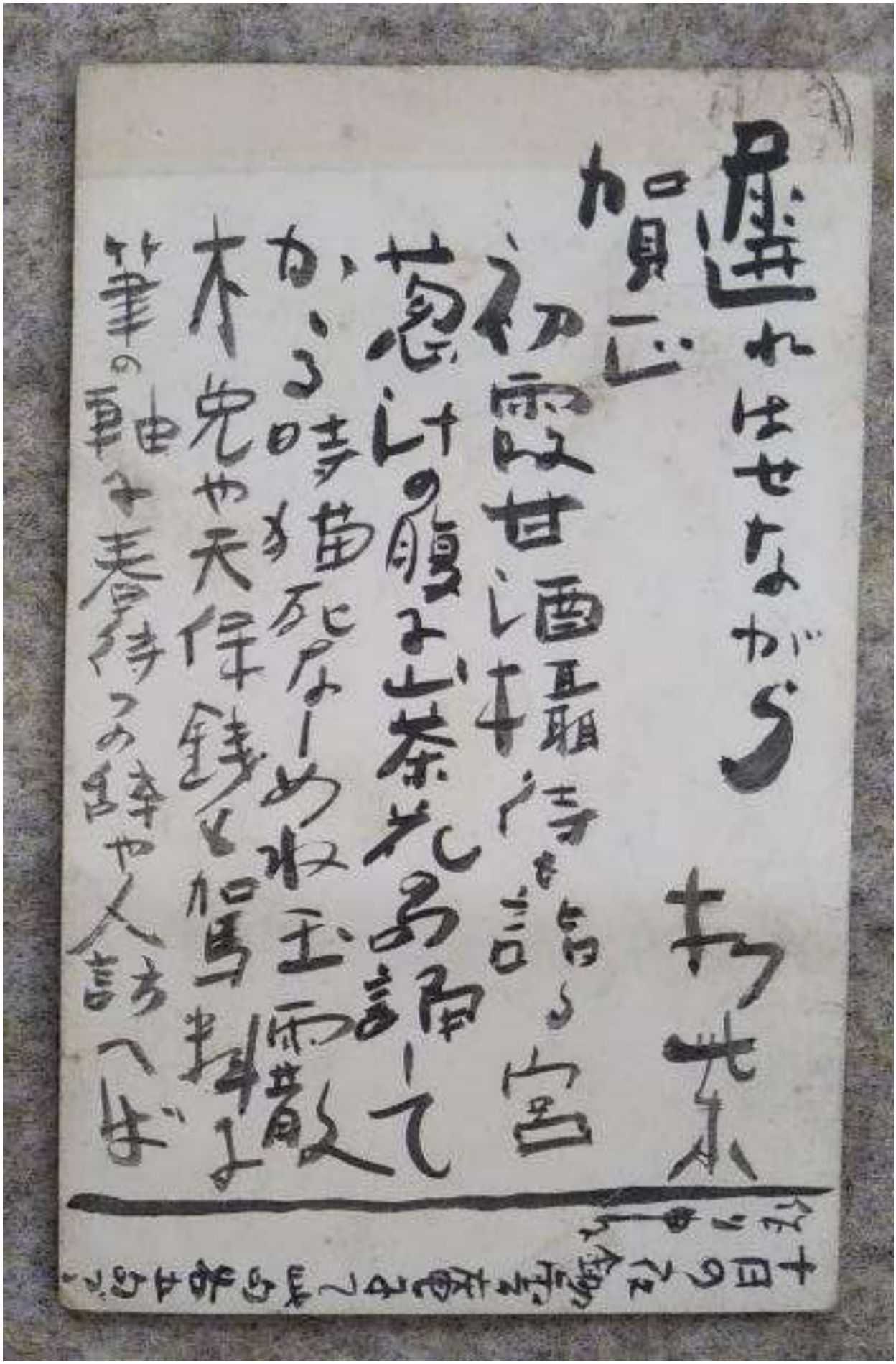
明治四十五年元旦

賀正

折柴　瀧井孝作

東京高山町馬場道





明治三十年十二月廿四日
子規病相

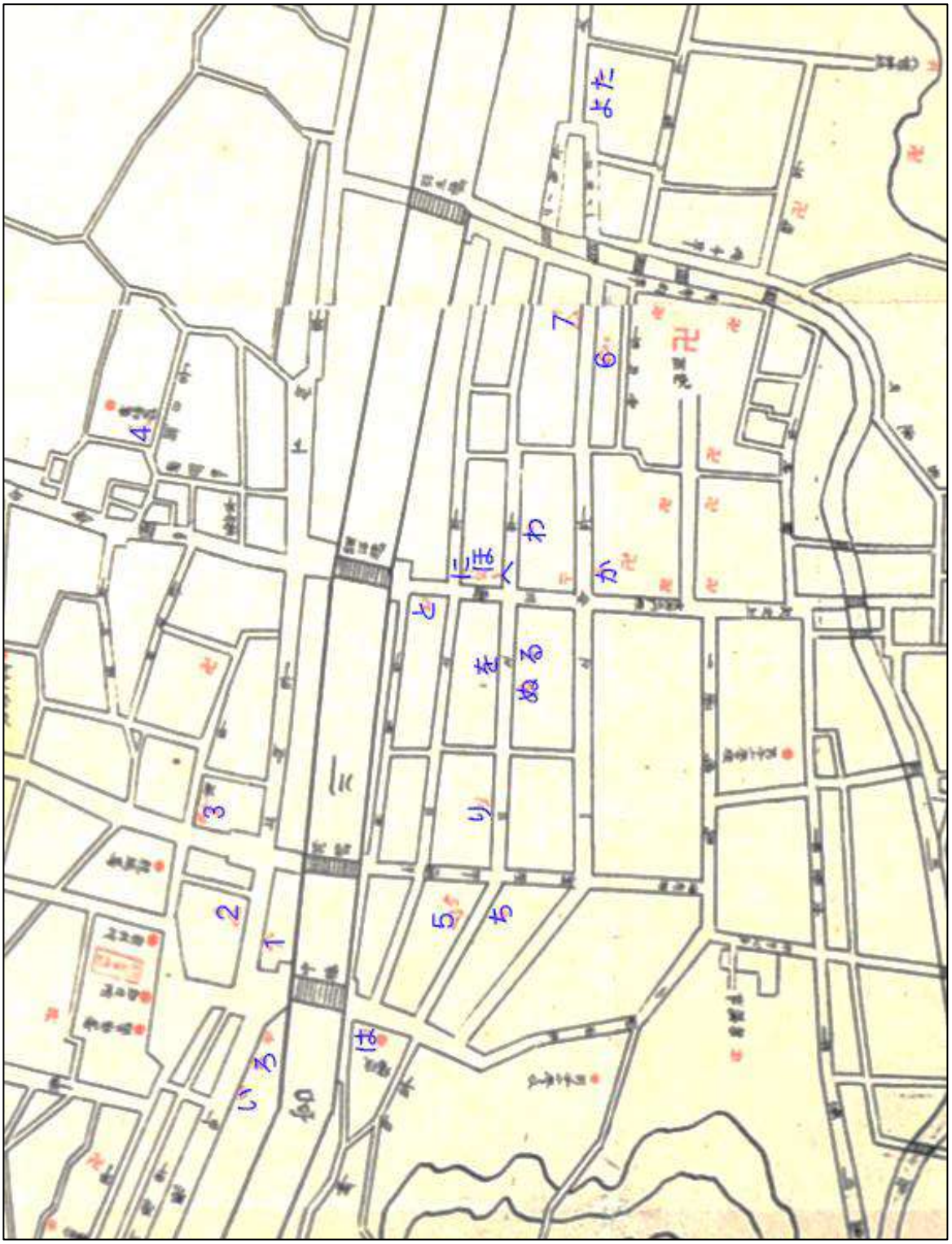
第三章　高山市街略図（明治四十二年九月二十日発行　住廣造）

［旅館］

1　上向町　三川屋
2　同　平野屋
3　浦　町　加藤屋
4　朝日町　金亀館
5　二ノ町上　長瀬旅館
6　一ノ町下　桐屋旅館
7　同　井端旅館

［商店その他］

い　川原町　梅盛園（落雁他）
ろ　同　月波僂（御料理）
は　神明町　洲岬屋
に　安川通　原三薬店
ほ　同　住伊書店
へ　同　飛騨銀行
と　同　三島豆本舗
ち　二ノ町　いく代（仕出し）
り　同　高山新報社
ぬ　同　芳國社（渋草焼）
る　同　平田書店
を　同　上木枡店（量器）
わ　同　柿下通天堂（薬）
か　一ノ町　内山忠一郎商店（薬）
よ　大新町　福田吉郎兵衛（春慶）
た　同　松山利平（織物）



飛騨高山まちの博物館所蔵　筆者にて一部加工・記入

高山市近代文学館調査・研究報告書

令和三年三月発行

編　集　一般社団法人　高山市文化協会

印　刷　飛　騨　印　刷　株　式　会　社

高山市西之一色町三―六四七―二八

電話　（〇五七七）三二―一一九一（代）